

論文

アメリカ大統領選挙人団制度の論点

— 2000年、2016年、2020年選挙を経て —

鈴木 健 司

同志社女子大学・表象文化学部・英語英文学科・教授

Issues on the Electoral College System for Electing the U.S. President:
Following the 2000, 2016, and 2020 Elections

SUZUKI Kenji

Department of English, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

序

アメリカ合衆国大統領は、副大統領と併せて唯一、全国の有権者の投票により選出される公職である。しかし憲法上、連邦議会は選挙の実施に関する権限を有しない。有権者による投票は各州と首都ワシントンDC（以下、各州と表記する）が集計して、それぞれがまず勝者を決定する。その後、各州が任命する選挙人の投票により、州の意向が集約されて、全国で1名の勝者が決定する。これが大統領選挙過程の大筋であり、州を代表して投票を行う選挙人の存在が、アメリカ大統領選挙制度を特徴づけている。

州の自律性を重視し連邦国家として建国したアメリカにとって、連邦政府の公職であっても、その選出に関する事項を州権の下に置くことは必然であった。しかし、有権者による選挙を実施するにもかかわらずその最多得票が勝利に直結せず、異なる原理により勝者が決するという点で、これは異例の制度である。その後の二百余年の歴史の中では、制度の複雑さに起因する問題点がしばしば指摘されてきたが、主として政治学上の議論に留まり、広く有権者の社会的関心事として共有されるには至らなかった¹。

しかし21世紀になり、事態は大きく動いている。近年の大統領選挙では、制度が内包する不合理性が明白な社会的混乱として有権者に認識されることが重なった。2000年選挙では、フロリダ州の投票結果が僅差となり、再集計をめぐってブッシュ（共和党）とゴア（民主党）が熾烈な訴訟合戦を繰り広げたあげく、最高裁判決を受け一般投票

（popular vote）からひと月以上経ってブッシュの勝利が確定するという混乱を生じた。選挙人投票（electoral vote）で勝者となったブッシュは、有権者による得票数の全国の合計では敗者ゴアを下回っており、民主党支持者に割り切れない思いを残すとともに、選挙制度の妥当性に関する議論を再燃させる契機となった。

一般投票と選挙人投票の結果の逆転は、2016年選挙でも再現された。同選挙ではまた、一般投票の勝者とは異なる候補者に投票した選挙人が複数発生したこともあって、有権者の意向が選挙結果に忠実に反映されないリスクの存在が改めて注目されることになった。2020年選挙では、一般投票に不正があったと主張するトランプ陣営が敗北を認めようとせず、選挙結果を覆そうと画策を続けた。一般投票から最終的な勝者の確定に至るまでの過程にも、有権者の意向によって勝者を決定することを妨げる可能性が様々な点で存在していることが再認識された²。

これらの選挙による混乱とそれによるアメリカ社会の分断を背景として、大統領選挙制度の改革をめぐる議論が2010年代後半から活発化している。問題の核心となるのは、州の意向を全国結果に反映するにあたって選挙人の投票を介していることであり、中でも、各州の選挙人が自州の一般投票における勝者に全員一致で投票する選挙人団（electoral college）という仕組みが一部の例外を除いて採用されていることである³。

本稿では、まずアメリカ大統領の選出方法が現行の形に落ち着くまでの経緯とその後の展開を歴史的に振り返り、

建国者たちが選挙人団制度を設けた意味を確認する。次に、大統領選挙制度改革をめぐり近年高まりを見せている議論の主要な論点のうち、とくに選挙人団に関わる事項について賛否両論の立場がどのようなものであるかを整理し、近年の選挙結果に照らしてその妥当性を検討する。最後に、2020年を含む過去3回の大統領選挙について、代表的な改革案によるシミュレーションを行ってその効果を検証し、現代における選挙人団の意味について考察する。

1 選挙人制度の成立事情

誰が大統領を選ぶのか。合衆国憲法第2条第1節第2項は次のように定める。「各々の州は、その立法部が定める方法により、その州から連邦議会に選出することのできる上院議員および下院議員の総数と同数の選挙人を任命する。但し、上院議員、下院議員および合衆国から報酬または信任を受けて官職にあるいかなる者も、選挙人に選任されることはできない」⁴。合衆国憲法は、イギリスから独立を達成した13邦が連合規約に基づく連衡の数年間を経て、より安定性の高い統治体制の確立を目的として制定したものである⁵。全体を広大な一つの共和国として統治することには懐疑的な見方も強く、実効力のある中央政府が望まれる一方で各州の自律性を確保することは大前提であったため、憲法では州権の強い連邦制が規定された⁶。

憲法制定に際して建国者たちは、人民が自らの直接的利益に基づき派閥を構成して政治参加することの弊害を警戒し、少数の選ばれた市民が政府を運営する共和政を採用した。「合衆国憲法の父」と呼ばれるジェイムズ・マディソン (James Madison, 1751-1836) は、次のように述べている。「このような制度のもとでは、公的な意見は人民の代表者たちが述べる方が、そのために集まった人民自身が述べるよりも公益によりよく叶うことになるだろう」⁷。大統領の選出方法にもこの思想が反映されている。現実問題としても、当時の未発達な情報伝達事情の下では、一般の人民が幅広く全国の大統領候補者から適任者を判断することは困難と考えられた。しかし議会在大統領を選出する仕組みでは立法府の行政府に対する影響力が強くなりすぎる。マディソンと共に憲法制定に尽力したアレグザンダー・ハミルトン (Alexander Hamilton, 1755-1804) は、大統領の選出には人民の意向が反映されることを前提として、大統領に適する資質を分析して適切に判断できる人々により選挙が行われることが望ましいとして、次のように述べている。「一般大衆の中から同じ市民により選ばれた少数

の人々こそ、そのような非常に困難な検討を行うために必要な情報と分別を備えている可能性が高い」⁸。選挙人による間接選挙という方法が採用されたのは、このような事情による。

当初の憲法規定では、選挙人は無記名投票により2名に投票することになっており、最多得票者が大統領、次点の者が副大統領となった。選挙人投票による勝者の決定にあたっては過半数の得票が要件とされ、過半数に達した候補者がいない場合や2名以上で同数の場合は連邦議会下院における各州1票の選挙により大統領が選出されることとなっていた。このような方法が憲法制定会議で合意を得たのは、連邦制の制度設計で対立していた人口の多い州と少ない州の両者の妥協が成立したことによる。選挙人数の算定の根拠となる上院議員の数は各州2名であり、下院議員の数は各州の人口に比例して付与される⁹。選挙人を各州の上院議員と下院議員の総数に基づいて配分し、彼らの選挙により大統領を選出することは、これだけを取れば、人口の多い州の利益に沿うものである。しかしその一方で、政党が存在しない当時の想定では、特定の候補者が過半数を得ることは難しく下院による決選投票に持ち込まれることも少なくないと見込まれていた。その場合は、各州が1票を投じるので、人口にかかわらず全ての州が対等な立場であるという小州の主張に合致する。

ハミルトンは、以上のような大統領選出方法が「あらゆる利点をうまく統合したもの」と称賛し、「何らかの重要性を持つものの中で、厳しい非難を免れ、辛くも反対者たちの承認を受けることのできたほぼ唯一の部分である」¹⁰と述べている。しかし実際には会議の終盤となり時間もなくこの形で決着せざるをえなかったのではないかという見方が支配的である。

大統領の選出方法について十分な議論が尽くされたとは言えないとしても、当初は重大な問題が生じることはなかった。1789年の最初の選挙では独立戦争の英雄で圧倒的な威光をもって憲法制定会議の議長を務めていたジョージ・ワシントン (George Washington, 1732-1799) が選ばれるという見通しは衆目の一致するところであり、実際にワシントンは選挙人全員の票を獲得して初代大統領となった。大統領選挙方法の問題点が露呈するのは、ワシントンが2期8年を務めた後に3期目を固辞してからである。

ワシントンの在任中に戒められていた党派対立が、その後任を選ぶ1796年選挙では表面化した。連邦党はジョン・アダムズ (John Adams, 1735-1801) を候補者に立てて勝利したが、得票数第2位は民主共和党のトマス・ジェ

ファーソン (Thomas Jefferson, 1743-1826) であり、異なる政党の正副大統領が選ばれることになった。1800年選挙では、民主共和党のジェファソンとアーロン・バー (Aaron Burr, 1756-1836) が過半数に達しない同数の得票で並んだため下院での決選投票となり、そこでの決着にも36回の投票を要した。

第3代大統領となったジェファソンが就任演説で「我々は皆リパブリカンであり、皆フェデラリストである」¹¹と述べたことは広く知られる。この発言は、党派を超えて国民統合のために働くという大統領職の性格を象徴するものと解されるが、自らが勝利した1800年選挙に政党政治の力学が強く働いたことをジェファソンが例外的な事象と捉えていることを示すものであるとの見解も存在する¹²。いずれにしても、政党を軸として展開する選挙戦を想定していない憲法規定では不都合が生じることは明らかであった。このため憲法第2条第1節第2項に代わる選挙規定として修正第12条が1804年に制定され、正副大統領を別個に選出する形ができて、現在まで続いている。

選挙に関わる実際の制度運用は、その後の歴史の中で徐々に確立された。アンドリュー・ジャクソン (Andrew Jackson, 1767-1845) は、1824年選挙で一般投票と選挙人投票でいずれも最多得票であったが過半数に達せず、下院の決戦選挙となり、そこで逆転負けを喫した。1828年選挙で雪辱したジャクソンが第7代大統領となった後、ジャクソニアン・デモクラシーの下で人民の政治参加を促進する流れは強まり、大統領選挙での一般投票の重要性は強調された¹³。このように19世紀前半には、各州の選挙人団として一人の候補者に与えられる勝者総取り制度 (winner-take-all system) がほぼ全州で確立された。

有権者の存在が重視される一方で、選挙人の存在は希薄になっていく。20世紀になると、選挙により決められる公職の数を削減する動きの中で、大統領選簡略投票 (presidential short ballot) が開始された。これは一般投票において投票用紙に選挙人の名前を記載せず大統領候補者名のみを示すもので、1917年のネブラスカ州を筆頭に、1936年までに16州が採用した¹⁴。間接選挙でありながら見かけ上は大統領を直接選ぶ形となる投票方法はこうして普及し、大統領を選出する主体が誰であるのかについて多様な解釈を可能にする下地を作った。

理念によって建国されたアメリカらしく、大統領選挙方法をめぐり論者たちがハミルトンやマディソンなど憲法制定時の指導者たちの言葉を主張に言及することは、現代でも少なくない。どこに焦点を当てるかは論者により異なる

が、突き詰めれば建国者たちが連邦制を機能させることを重視して述べたことをどのように捉えるかに掛かってくるだろう。国家規模や国民構成が変化したアメリカにおいて、地域対立や人口の多い州と少ない州の対立は過去の事実にすぎないのか。現代においても州の自律性は重視されるべきものであるのか。大統領選挙方法に関する立場は、論者の建国理念と国家観に関わる問題と言える。

2 大統領選挙史に見る問題点

大統領選挙の現行制度に異を唱える論者の多くが最大の矛盾として指摘するのは、一般投票で最多得票の候補者が大統領に選出されない事態が生じることである。このような選挙結果は「民主主義の中心的教義である政治的平等と多数決原理の侵害」であるという批判を呼んでいる¹⁵。

この問題に関する選挙での大混乱は19世紀後半に2件発生している。1876年選挙は、ラザフォード・ヘイズ (Rutherford B. Hayes, 1822-1893) (共和党) とサミュエル・ティルデン (Samuel Tilden, 1814-1886) (民主党) の対決で、一般投票で最多得票のティルデンが勝利していたフロリダ、ルイジアナ、サウスカロライナの3州の開票結果に疑義が提出され結果が逆転したため、一般投票で敗北したヘイズが大統領となった。公式記録ではこれが一般投票と選挙人投票の結果の不一致を生じた最初の大統領選挙とされるが、実質的にはそうとは言えないというのがアメリカ史の定説である。まず同年に州に昇格したばかりのコロラドは一般投票の準備ができなかったため、選挙ではなく州議会の任命により共和党の選挙人を決定した。また、当時の南部では依然として黒人の投票が不当に抑圧されており、黒人の多くは奴隷解放宣言を発したリンカーンの政党である共和党を支持していた。仮にコロラドで選挙が実施され南部諸州で自由で公正な投票が実現していれば、共和党候補者のヘイズは一般投票でも勝利したはずであり、当時の社会も概ねそのように認識していた¹⁶。

1888年選挙は、現職大統領グローヴァー・クリーヴランド (Grover Cleveland, 1837-1908) (民主党) とベンジャミン・ハリソン (Benjamin Harrison, 1833-1901) (共和党) の対決で、一般投票の数でクリーヴランドが上回ったが選挙人の数ではハリソンに及ばなかった。この結果は基本的にはクリーヴランドの南部6州での得票率が高かったことに起因する。しかしハリソン陣営が地元のインディアナで不正を働いていたという指摘があるほか、大票田のニューヨークで票の買収を行っていたことを当時の民主党

寄りの新聞が報じている。これらの事実が正しいとすれば、クリーヴランドはニューヨークを獲得して選挙人の数でも上回っていた可能性がある¹⁷。19世紀末はアメリカの政治環境が腐敗していた時期であり、選挙制度よりも政治の浄化の方が喫緊の課題であった。

選挙人団に関連して難点と見られてきたもう一つの問題は、選挙人が自らの意思に基づいて州の意向とは異なる候補者に投票する、いわゆる「不実な選挙人」(faithless elector)の問題である。建国者たちは、大統領選挙人が自身の個別の判断によって投票することは想定しなかった。州と政党が党への忠誠心に基づいて選挙人を選出することは19世紀初頭以来の慣習となっており、選挙人が州の意向に従って投票することは広く国民的了解事項となってきた。不実な選挙人は稀に出現したが、それを原因として選挙人投票による勝敗が選挙人獲得数に基づいて想定される勝敗と齟齬を来す事態になったことはない。こうして、選挙人を介した間接選挙が選挙人の投票行動自体によって重大な混乱を生じることが免れてきたので、不実な選挙人の問題は理論上の危惧以上のものには発展しなかった。しかし2016年には、二大政党の候補者同士の憎悪が渦巻く異様な選挙戦の中で、アメリカ国民は次期大統領について困難な選択を迫られ、選挙人投票では7人の選挙人(共和党2人、民主党5人)が州の意向に沿わない背信的投票を行った。

これらの諸問題を前にしても、選挙制度改革を求める大衆の運動は目立つ形では起こっていない。その背景として、一般投票と選挙人投票の結果の逆転については、そもそも一般投票の公式な全国集計の結果がすぐには発表されないという事情がある。一般投票は各州の管轄下で実施されるので、公式な数字も各州政府が発表する。それらが出揃った後に連邦政府が集計して発表する頃には、すでに一般投票から数週間も経過している。メディアによる非公式な集計結果は即日報道されるが、あくまでも暫定的な数値であり、僅差であればあるほどどちらが上位であるかは断定しにくい。こうして一般投票と選挙人投票の結果の逆転という事実は、徐々に確定されて人々の知るところとなる。不実な選挙人が出現した場合も、基本的には各州内での出来事であり、選挙結果に影響が出たわけではないので、全国的に注目されることは少ない。

近年の大統領選挙に伴う人々の不満や怒りは、制度よりもむしろ目前の政敵に向かったのではないか。混乱を極めた2000年選挙は、その終結後も双方の支持者の間に溝を残し、ブッシュ政権の8年間は、テロとの戦いのため団結が見られたこともあったとはいえ、総じて政党間の対立や双

方の支持者の対立が深まった時代である。2016年選挙では、トランプとクリントンのいずれも好感度の低い候補者であることは選挙戦中から顕著であった。有権者の多くは支持する候補者に投票するというよりは嫌いな候補者の対立候補に投票するという意識が強かったことが、世論調査から明らかになっている¹⁸。多くの信奉者を生み出したトランプは、2017年1月の就任時で45%の支持率を獲得していたとはいえ、非支持率はそれを上回る47%で、4年間の任期中わずかな期間を除くほぼ全期間で非支持率が50%を超えていた¹⁹。トランプは自分と意見の異なる相手を公然と非難して対立姿勢を際立たせる政治手法により、アメリカ社会を分断した。

再選に失敗した2020年選挙では、結果を覆すことを企図するトランプの様々な試みは、通常は注目されない一般投票後の過程に人々の目を向けさせ、アメリカ大統領選挙が間接選挙であることを改めて想起させることになった。トランプが郵送投票や票集計現場などにおける不正を主張して問題提起したことは、事実の確かな裏付けを欠いてはいたものの、選挙制度史のうえでは特筆すべき事件となった。

3 選挙人制度の論点

アメリカ大統領選挙の方法をめぐっては様々な観点から論じられるが、その多くは選挙人の存在に関わるものである。主要な論点としては、(1)一般投票と選挙人投票の結果の逆転の是非、(2)各州への選挙人配分の妥当性、(3)激戦州の存在、(4)不実な選挙人、(5)過半数か最多得票か、といったことが挙げられる。

(1) 一般投票と選挙人投票の齟齬

一般投票の敗者が、それにもかかわらず最多数の選挙人を獲得して大統領となることは、民意を公正に反映していると言えるのか。一般投票の勝者が最終的に大統領にない可能性がある選挙方法は、民主主義の原理から逸脱しているのではないか。これが選挙人制度に関する争点の最たるものと言えるだろう。

選挙人制度支持派は、選挙人投票による勝敗決定という了解のもとで勝ち抜いた候補者の一般投票における得票数を問題にすることの意味自体を疑問視する²⁰。候補者たちは選挙人を最も獲得することを目指して選挙戦に臨んだのであり、勝者はその目的に適う戦略を取ってそれが奏功した。仮に一般投票により勝敗が決するのであれば、ブッシュもトランプもそのための有効な資源配分を行って選挙戦を

戦ったはずで、それにより生じる結果も当然異なる。したがって実際と異なる勝敗決定方法による勝敗を論じることは無意味であるという。

正論ではあり、明確なルールに基づく勝者の正当性に瑕疵があるわけではない。しかし選挙制度や選挙戦略がどうであれ、有権者の支持を最も多く得た者が勝者にならないことは妥当であるのかという根本的問題は依然として残る。特定の勝者の正当性ではなく、勝利を決めるルールの妥当性の問題である。この観点は、選挙人制度支持派による前述の主張からは見過ごされているが、実際の選挙結果をどのように解釈することができるのか。一般投票と選挙人投票が逆転した事例を検討してみよう。

2016年選挙では、トランプ（共和党）が306人、クリントン（民主党）が232人の選挙人を獲得してトランプが勝利した。しかし一般投票において有権者から得た票の全米合計は、トランプが約6298万票、クリントンが約6585万票で、クリントンが約287万票の差で上回っていたことになる。この数字から全国的にはクリントンの支持者が多いという事実は否定できないが、事はそれほど簡単ではない。州別の選挙結果を見ると、クリントンは支持基盤であるカリフォルニア州で約427万票の大差をつけて勝利しており、この数字を除く49州と首都ワシントンDCの合計では、逆にトランプが一般投票の得票数でも約140万票の差でリードする（表1参照）。

クリントンはたしかに全米で最多の一般投票を獲得したが、そのリードはカリフォルニア州に負うところがきわめて大きい。そして同州における得票差（plurality）の427万とは他州にとっては及びもつかない大きな数字であり、全米50州のうち27州は、州の全人口でもこの数字に達しない²¹。カリフォルニア州は有権者の数が全米も群を抜いて多いうえ民主党が安定した支持基盤を築いているため、大統領選挙では民主党候補者と共和党候補者の得票差は数百万となることが通例である²²。不均衡に大きな影響力を持つ1州の得票差が決定づけた全国集計の勝敗をもって国民

の意思とすることは、多数決の原理には合致するとしても、連邦制の原理との関係で公正であると言えるのかどうか。この観点は、逆に改革派の主張において欠落するか軽視されている。

このような状況を背景として、選挙人制度支持派は、支持率の高い少数の州に依存したクリントンは負けるべくして負けたと考え、選挙人制度はまさにこのような（支持基盤の偏在した）候補者の勝利を阻止する目的で存在していると断じる²³。2016年の事情を見れば、クリントン支持の大州に匹敵するトランプの強固な支持基盤となったのは、ラストベルト（Rust Belt）と呼ばれる諸州（ペンシルベニア、ウエストバージニア、オハイオ、インディアナ、ミシガン、ウィスコンシン）であった²⁴。一般投票におけるトランプ票のこれらの諸州での合計は約135万票で、両候補者の大票田であるカリフォルニア州とラストベルト6州の結果は、ほぼ相殺される。これらの数字を除いた43州と首都ワシントンDCの合計で見ると、両者の一般投票の得票数は拮抗する（表2参照）。

一般投票がほぼ同数のこれらの州で、選挙人の獲得数ではトランプが大差をつける。トランプはラストベルト6州以外の24州で勝利して249人の選挙人を獲得し、これらの州での得票差の合計は約681万人であった。選挙人一人あたりに要した得票差は約27000である。一方、クリントンはカリフォルニア州以外の19州と首都で勝利して177人の選挙人を獲得し、そこでの得票差の合計は約2465万であった。選挙人一人あたり約139000の得票差を要したことになる。クリントンは選挙人の比較的多い州で大きな得票差で勝利を得たのに対して、トランプは概して中小の州で効率良く勝利を収めた。両政党の支持基盤のこのような非対称は毎回の選挙で共通に見られる現象であり、現代の一般投票が選挙人投票に転換されるプロセスは共和党に有利に作用する傾向にある。現行制度の問題点が党派性を帯びている事実は、政治的に中立に議論することを難しくしている。

表1 2016年選挙 全米とカリフォルニア州の結果

	Electoral Vote		Popular Vote		Popular Vote		Popular Vote		
	Trump	Clinton	TRUMP		CLINTON		TOTAL	Plurality	
California	0	55	4,483,814	31.62%	8,753,792	61.73%	14,181,604	-4,269,978	-30.11%
49 states + DC	306	177	58,501,014	47.76%	57,099,722	46.62%	122,487,672	1,401,292	1.14%
Total	306	232	62,984,828	46.09%	65,853,514	48.18%	136,669,276	-2,868,686	-2.10%

Official 2016 Presidential General Election Results (compiled by Federal Election Commission) より作成

表2 2016年選挙 ラストベルト6州とカリフォルニア州以外の結果

	Electoral Vote		Popular Vote		Popular Vote		Popular Vote		
	Trump	Clinton	TRUMP		CLINTON		TOTAL	Plurality	
Indiana	11	0	1,557,286	56.94%	1,033,126	37.77%	2,734,958	524,160	19.17%
Michigan	16	0	2,279,543	47.50%	2,268,839	47.27%	4,799,284	10,704	0.22%
Ohio	18	0	2,841,005	51.69%	2,394,164	43.56%	5,496,487	446,841	8.13%
Pennsylvania	20	0	2,970,733	48.18%	2,926,441	47.46%	6,165,478	44,292	0.72%
Wisconsin	10	0	1,405,284	47.22%	1,382,536	46.45%	2,976,150	22,748	0.76%
West Virginia	5	0	489,371	68.50%	188,794	26.43%	714,423	300,577	42.07%
6 states in Rust Belt	80	0	11,543,222	50.44%	10,193,900	44.54%	22,886,780	1,349,322	5.90%
43 states + DC	226	177	46,957,792	47.15%	46,905,822	47.09%	99,600,892	51,970	0.05%
49 states + DC	306	177	58,501,014	47.76%	57,099,722	46.62%	122,487,672	1,401,292	1.14%

Official 2016 Presidential General Election Results (compiled by Federal Election Commission) より作成

(2) 各州への選挙人配分

各州に配分される選挙人の数は「その州から連邦議会に選出することのできる上院議員および下院議員の総数と同数」²⁵と定められている。1804年に憲法修正第12条が発効し、大統領選挙方法に関する当初の規定による不都合が解消されたが、その際にも各州の選挙人の数の見直しは行われなかった。上院議員の数を各州2名、下院議員の数を人口比例とする二院制が憲法制定時における大州と小州の妥協によるものであったことは前述のとおりであり、両院の議員数の合計という選挙人の配分基準は、概ね人口比例の原則に近い。しかしこの方法の妥当性については問題点が指摘されている。選挙人投票で行使される州の票数にはその州における一般投票での勝者の得票以外の要素が反映されるという点で適正でない。そのように論じられる要因は複数存在する。

第一に、一般投票における対立候補の支持者である。大統領選挙ではメイン州とネブラスカ州以外では勝者総取り制度が採用されており、一般投票の勝者は得票率にかかわらずその州の全ての選挙人を獲得する。一つの選挙区から一人を選出する選挙制度において多数の死票 (wasted vote) が発生することは、下院議員選挙における小選挙区制などをはじめ、広く見られる現象である。しかし大統領選挙では、各州における投票によって決定されるのが候補者の最終的な勝敗ではなく誰を支持するかについてのその州の意思に留まるという点で、他の多くの選挙とは異なる。州は、勝者の支持者のみならず、対立候補の支持者も含めて算定された数の票を選挙人投票において行使することになる。これは他候補の支持者から見れば、投票による自らの意思表示が結果に反映されないばかりか、支持しない候補に対する選挙人投票での支持を自らの存在が後押しして

いるのに等しい。とくに二大政党のいずれかが固い支持基盤を持つ州では、少数派政党の支持者は、選挙時においては対立する多数派を利するためにのみ存在しているようなものである。

第二に、投票しなかった有権者である。各州が選挙人投票において一定数の票を行使できることは憲法上保証されており、一般投票における投票率に影響されない。一般投票における得票数が選挙人投票に及ぼす影響は皆無であり、一般投票では得票数にかかわらずその州での最多得票者が勝者となる。とくに一方の政党が強い州では、多数派政党の支持者は一般投票に行っても行かなくても選挙結果が変わらないだけでなく、投票に行ったのと同じ影響力をその後の過程で保証されることを意味する。支持したい候補者を持たない有権者が投票を棄権したとしても、その後は、そのような人々も含めて算定された数の選挙人が票を投じることになる。

第三に、市民権を持たない住民である。選挙人の配分数の根拠となる下院議員の数は、連邦政府が10年ごとに実施する国勢調査に基づき定められるが、この調査で表される人口には市民権を持たない非市民 (non-citizen) が含まれる。非市民の数や人口に占める割合は州により開きが見られ、カリフォルニア (約538万人、14.1%)、テキサス (約284万人、10.9%)、ニューヨーク (約206万人、10.5%)、フロリダ (約183万人、9.5%) など数字が高い²⁶。人口に非市民が含まれていることにより有権者以外の数が選挙人の数に影響を及ぼしている州は15州あるとされる²⁷。市民 (有権者) のみの数に基づいて計算すると、カリフォルニア (-5)、テキサス (-2)、ニューヨーク (-1)、フロリダ (-1)、ワシントン DC (-1) では選挙人の数が減り、ペンシルバニア、オハイオ、ミシガン、ノース

カロライナ、インディアナ、アイオワ、ミズーリ、ルイジアナ、オクラホマ、モンタナ（各+1）では増える。この数で選挙人投票が行われたと仮定した場合、2016年選挙（クリントン232→225、トランプ306→313）、2020年選挙（バイデン306→301、トランプ232→237）と、いずれも勝敗に影響はないが、民主党支持票の一部が共和党支持票に変わる。一般にアメリカの移民増加の現象はリベラルな民主党に有利に働くと考えられているが、移民の影響は投票行動だけでなく選挙制度の枠組み自体についても民主党を優位にする傾向にあることがうかがえる。

以上のような点で算定根拠に歪みを内在する選挙人の数が、全体として誰にとって有利で作用しているかについては、諸説が存在する。まず、勝者総取り制の下では選挙人団の大きい州の選挙人投票の影響力が大きいことは否めないため、人口の多い州はこの点で本来的に優位に立っている。さらに死票、非投票者数、非市民人口が一般に大州に多い傾向にあることは、その優位を拡大する方向に作用している。一方で、選挙人配分が完全な人口比例によらず、上院議員の数に相当する各州2名ずつを一律に上乘せしていることは、人口の少ない州に有利な配慮であることもまた明らかである。選挙人の数が完全に人口比例の原則によって下院議員と同数に定められていたと仮定すれば、2000年選挙（ブッシュ 271、ゴア 266）はゴアが225対211で勝っていたという試算もある²⁸。下院議員の数が大きくなるほど、選挙人の算定根拠とされる上院議員と下院議員の総数は人口比例の原則に近づき、逆に下院が小さくなるほど人口比例の原則の歪みは大きくなる。このことから下院の規模の設定の仕方によって大統領選挙の結果が変わってくるという指摘もある²⁹。

憲法制定時には、二院制の採用によって人口の多い州と少ない州の妥協を成立させることが重要であり、連邦議会のあり方についてはそれで問題は発生しなかった。しかし、両院の議員の総数という大統領選挙人の人数は、結果として当時の下院の規模に基づく恣意的な数字となった。さらに、当時多くの奴隷を有していた南部諸州の意向をふまえて、当初の憲法は人口を「自由人の総数に、自由人以外のすべての者の数の5分の3を加えたものとする」³⁰と定めており、非市民を人口に含めることが政治的合意を得て、現在に至っている。現代では事情の変化した点も多いが、選挙人の配分方法に見られる矛盾や不合理が特定の立場のものを有利にしているとは断定できないため、問題点の議論は個別の指摘に留まり、抜本的な改革には至っていない。

（3）激戦州

大統領選挙では、各州が意思を表明する機会を設けて間接選挙の形を採ることにより連邦制の原則が尊重されていると考えられる。選挙人制度は州の意思を表明するための重要な手段と考えられてきた。しかし現代では、選挙における州の存在意義や果たしうる役割にかなりの格差が生じてきているのではないかと考えられる。各州の持つ選挙人の数により影響力が異なることは自明であるが、ここで問題とされるのは、選挙人の数とは無関係に、社会的注目度や候補者たちが寄せる関心度の強さの相違である。

赤い州と青い州の対立と言われるほどに社会的分断の進んだ現代のアメリカにおいて、大統領選挙で候補者たちは、勝利が見込まれる「確実な州」(safe state)を計算に入れたうえで、二大政党の勢力の拮抗する州を獲得することに全力を注ぐ傾向が強くなっている。時代の状況によって優位な政党が揺れ動く「激戦州」(swing state)の動向が最終的な勝敗に直結するという見方が一般的になっている。多くの選挙人を有する州の影響力は揺るがないものの、カリフォルニアやニューヨークなどは民主党の勝利が当然視されているため、そこでの動向への注目度は高くない。まして少ない選挙人しか持たず二大政党の競争も起こりにくい小州は、選挙戦の中で埋没してしまいかねない。一方、フロリダやペンシルバニアなど勝敗の見通しの立ちにくい州は双方に勝利の可能性があるため、選挙戦の主戦場となり注目を集める。

その一方で、勝敗の変わる見込みの乏しい確実な州に候補者の関心が向けられないことへの批判に対して、選挙人制度の支持者は、確実な州が永続的なものではないことを挙げて反論する。地域で特定の政党が比較的優位を確立することは、普遍的に見られる現象であり、アメリカの特定の地域に限ったことではない。そして共和党または民主党の支持基盤が強い州においても、そのような一方の優位は必ずしも長く続く保証はない。2016年選挙でのトランプの勝利は、長年にわたって民主党候補者を勝たせ続け「青い壁」(Blue Wall)と呼ばれていた諸州のうちペンシルバニア、ミシガン、ウィスコンシンを切り崩して選挙人を獲得したことが大きな勝因となった。2020年選挙ではバイデンがこれらの州を奪回しただけでなく、「赤い州」であったジョージアとアリゾナで勝利して色を塗り替えた。共和党の優位が続いているテキサスも、2020年の得票率の差は約5ポイントまで縮まっており、両政党の勢力争いは激しさを増している³¹。2000年から2020年の6回の大統領選挙で全て同じ政党の候補者が勝利した州は36州あるが、アメ

リカの人口動態は変化しており、それが政治文化に影響を及ぼす可能性もある。

特定の州の結果が過度に大きな影響力を持つことも、選挙人制度への批判的となりやすい。典型的な例は2000年選挙である。この選挙はフロリダ州で接戦となり、僅差の場合に再集計を義務付ける州法の規定により、勝敗をただちに確定することができなかった。この時点でフロリダ州を除く他州で確定した選挙人の合計は、ブッシュ（共和党）246人、ゴア（民主党）266人で、いずれも過半数に達しなかったため、最終的な勝者も確定しなかった。訴訟合戦の結果に、連邦最高裁判所はフロリダ州におけるブッシュの勝利を認め、ブッシュがフロリダ州の25人を加えて271人の選挙人を獲得して新大統領となることが確定した。この時のフロリダ州の一般投票の結果は、ブッシュ2,912,790票、ゴア2,912,253票の僅差である³²。仮にゴアがあと538票多く獲得していればブッシュの得票を上回り、その結果として過半数の選挙人を獲得して大統領選挙の勝者となっていたことになる。

選挙人制度の批判者は、一つの州におけるこれほどわずかな得票数の違いによって最終結果が変わってしまうことの妥当性に疑問を呈する³³。僅差の集計結果はどのような選挙方法にも起こりうるが、大統領選挙では一般投票における小さな勝利の結果が選挙人投票ではより大きな力となって作用するため、批判の対象となりやすい。2000年選挙では、フロリダ州におけるブッシュの僅差の勝利が、そこで終わることなく波状効果をもたらして、選挙人投票の過半数を与えるほどの結果を生んだのである。激戦州の存在は、まさにこのような現象と同様に、選挙人制度の問題点を増幅して見せる効果を生み出している。

（4）不実な選挙人

選挙人は、一般投票の結果に従って定められた候補者に投票することが前提とされる。この原則が破られて結果に問題を生じたことはないものの、21世紀となり、民意に反する投票を行う選挙人が出現することが増え、選挙人の存在は改めて疑問視されている。第一段階（一般投票）で州の勝者を決定した後に第二段階で全州の意思を集約して大統領を選ぶという手順を肯定するとしても、なぜその過程に選挙人による投票という不確実要素を入れるのか。

現行制度の支持派は、実際の投票に際してそれとは異なる投票が可能であることが、重大な不測の事態を解決する手段となりうることを指摘する³⁴。その一例は、一般投票の後、選挙人投票までの期間に一般投票の勝者が死亡また

は大統領に就任する資格を喪失した場合である。この場合、全ての選挙人が一般投票の結果に基づき投票したとすると、選挙人投票で過半数を得る候補者は出現しないので、大統領選出は下院での選挙に委ねられる。一般投票の勝者である大統領候補が欠けた状態で、民意に基づく次善の選択はおそらく副大統領候補者であろう。しかし下院における政党勢力の如何にかかわらず、その選択肢はない。憲法が「大統領としての得票者一覧表の中の3名を超えない上位得票者の中から、大統領を選出しなければならない」³⁵と規定しており、副大統領候補者はこれに該当しないからである。下院には事実上、選挙人投票で敗北が想定されていた候補者を大統領として選出する以外の選択肢が存在しない。

次期大統領が就任前に欠けた場合について、憲法修正第20条第3項（1933年成立）には次のような規定がある。「大統領に選出された者が、大統領の任期の始期として定められた時に死亡していた場合には、副大統領として選出された者が大統領となる。大統領の任期の始期として定められた時まで大統領が選出されていない場合、または大統領として選出された者がその資格を備えていない場合には、副大統領として選出された者が、大統領がその資格を備えるに至るまで、大統領の職務を行う」³⁶。この規定は選挙人投票により大統領と副大統領が選出された後の期間に関わる内容であり、選挙人投票前についてはカバーされない。

したがってこのような場合、最も民意に即した結果は勝者の獲得した選挙人団が一致して副大統領候補者に投票することによってのみ得られるのではないかと、ということである。しかし、選挙人に対して基本的には州民の意向に忠実な投票行動を期待する一方で、非常時の対処を選挙人の個人的判断に委ねることは、合理的と言えるだろうか。現状は政党や州にかかわらず、誰の利益にもならない制度上の不備である。不実な選挙人に依存するのではなく、憲法修正などにより速やかに制度を整備することが合理的であろう。それが最善であることは論者たちも当然承知のうえで、そのような憲法修正が行われるまでの応急措置として不実の選挙人が機能しうることの利点を説くのである。

不実の選挙人の出現は稀な現象ではあったが、各州はその防止のための措置として、選挙人の投票行動を拘束する措置を講じてきた。州の定める候補者に投票することを選挙人に誓約させることに始まり、それに関する法整備を進める州も増加した。2017年春までに、29州と首都ワシントンDCが、選挙人が事前に誓約した候補者に投票することを法的に義務付けている。そのうち6州は、誓約と異なる投票行為を犯罪または軽犯罪として扱うか罰金を科してお

り、他の多くの州は、誓約と異なる投票を法的に無効として選挙人を交代させることを法律で規定している³⁷。

連邦最高裁判所は、選挙人の自由意志に基づいて投票することについて否定的な見解で一貫している。まず大統領選挙人の選出に関する州の権限については、1892年、ミシガン州法の合憲性をめぐるマクファーソン対ブラッカー (McPherson v. Blacker) 事件で次のように明言した。「憲法は選挙人の任命が一般投票により行われると規定していない」。「憲法上、選挙人の任命は州の排他的権限である」³⁸。1952年には、レイ対ブレア (Ray v. Blair) 事件³⁹で選挙人投票において州の意思に合致する候補に投票することを州が選挙人に誓約させることについて、合憲であるとの判決を下した。

誓約を破って投票した選挙人が法的に責任を追及される事案はこれまで発生してこなかったが、近年になり事態は動いている。2016年選挙で4人の不実の選挙人が出たワシントン州は、彼らに1000ドルの罰金を科す州法を発動し、連邦最高裁判所は2020年、その合憲性をめぐるシアファロ対ワシントン (Chiafalo v. Washington) 事件⁴⁰で9人の全員一致により合憲の判断を下した。敗訴した原告の代表はマイクロソフト社に勤める37歳男性で、ワシントン州の一般投票の結果に基づきクリントン (民主党) に投票することを誓約していたにもかかわらず、トランプではない共和党所属の人物に投票した。クリントンとトランプが両者ともに過半数の選挙人を得られなくなる結果を狙った確信犯的な行動であったとされている⁴¹。

現代において、一般大衆の主情的な行動を恐れ賢者の冷静な判断に期待するという当初の意義はすでに失われており、州の意向を連邦議会に伝えるのにも選挙人の介在は不可欠ではない。一般投票の結果に応じて、州に配分された数の票が自動的に勝者に与えられる制度に変えても、実務上の問題は生じないはずである。しかし現実には、選挙人投票の自動化ではなく、人間の投票行動によって州の意思を表明する形を維持することを前提として、不実の選挙人の出現防止に努めることが主流になりつつある。

(5) 過半数ルールと最多得票ルール

大統領選挙に勝利するためには、過半数の選挙人を獲得することが要件であるが、各州の一般投票では得票率にかかわらず最多得票者が勝者として認められる。これに対して過半数ルールを一般投票においても徹底することの重要性を主張する議論がある。

建国者たちは大統領選挙における「過半数」の決定を重

視していたと考えられ、その原則は現在も憲法上継承されている。ハミルトンは次のように述べている。「過半数の票が必ずしも一人の人物に集中するとは限らないし、過半数に達しない投票を確定的なものとして認めることは安全でないかもしれないから、このような事態が偶発した際には、得票数上位5名の候補者のうちから大統領職に最適と考えられる者を下院が選出することになっている」⁴²。憲法はこのような下院における決選投票 (contingent election) において各州1票ずつ与えることを定め、勝者の決定については「大統領は全州の過半数をもって選出されるものとする」と明記している⁴³。

やがて二大政党制が発達し、多数の候補者に票が分散することは稀になったため、選挙人投票において過半数得票者が生まれえない事態となる懸念は大幅に減少した。しかしそのことは、大統領選挙の勝者が過半数の民意を得て選出されていることを必ずしも意味しない。そもそも、各州の勝者が一般投票の過半数を得ている場合であっても、その後選挙人投票を経るため、最終的には全国の一般投票の四分の一しか得ていない者が勝利する可能性がある⁴⁴。実際には各州の一般投票の勝者に過半数の得票は要求されず、最多得票者が勝者となるので、政治的立場の近い複数の候補者に票が割れた結果、漁夫の利で勝利を得ることも起こる。各州の票を一人の候補者に集約する選挙人団制度の存在は多党派乱立を抑制する役割を果たしていると言われるが、過半数によらない制度下では、有力な第三の候補者が立候補した際には多数の民意に合致しない者が選出される可能性があり、三人目の候補者がそれほど有力でない場合でも接戦の選挙では大きな影響を及ぼす可能性がある。

大統領選挙で二大政党の候補者以外が存在感を示したものとしては、1912年選挙の例が顕著である。この選挙は再選を目指す現職のタフト (William Howard Taft, 1857-1930) (共和党) とウィルソン (Thomas Woodrow Wilson, 1856-1924) (民主党) の対決となったが、一度はタフトに後継を託して退いていた前大統領セオドア・ローズヴェルト (Theodore Roosevelt, 1858-1919) が変心し共和党での指名争いに敗れた後に新党を作って立候補した。これにより、48州のうち40州を制したウィルソンが435人の選挙人を獲得して圧勝したが、一般投票の得票率は41.8%と過半数には遠く、選挙人獲得数で2位 (88人) のローズヴェルトと3位 (8人) のタフトの一般投票を合計すると過半数に達する。ウィルソンの勝利は明らかに共和党の支持票が割れたことが原因であり、民意の総体としてはむしろ共和党の側に傾いていたと言える。

より新しいところで2000年選挙では、緑の党からラルフ・ネイダー (Ralph Nader, 1934-) が立候補して、フロリダ州では97488票を獲得していた。環境や消費者の権利に関する社会活動で知名度の高いネイダーに票を投じた有権者は、政治的にはリベラル寄りと考えられるので、もし候補者名簿にネイダーの名前がなければゴアを支持していた可能性が高いと考えられる。

前述のように多数派の民意の支持が複数の候補者に分かれた場合に、実質的な支持率で劣る対立候補でなく次善の選択を可能にするために、一般投票において過半数の得票を要件とする制度改革が必要なのではないかというのが、この問題について論者が指摘するところである⁴⁵。各州が選挙結果を連邦議会に報告する期限を繰り下げたうえで、一般投票で過半数の得票を得た候補者がいなかった場合に改めて決選投票を実施できるようにすることが基本的な方法となるが、二回の選挙を想定することは有権者と州のいずれにとっても負担が大きい。一般投票で順位を付けて投票する方法を採用すれば、実質的に民意による選好を適正に反映する候補者を勝者とするのが可能であろう。

4 選挙人団制度の利点と改革案

このように多くの争点を持つ選挙人団制度の利点は何であるのか。現行制度の維持を主張する人々が守ろうとしている価値はどのようなものであるか。一般に、選挙人団制度の存在は、人種マイノリティを守るものとされている。一般投票の全国集計では多数派の中で数の力を持たないアフリカ系住民などは都市部を抱える州に多く居住しており、そのような州は多くの選挙人を持っている。その獲得のために大統領候補者はマイノリティの主張を無視できない。

しかしそのような説明に対して改革派は次のような反論を加えている。アフリカ系人口の比率が高いのはルイジアナ、ミシシッピ、アラバマ、ジョージア、サウスカロライナ、ノースカロライナ、ヴァージニア、メリーランドなど(20~38%)であり、これらの南部諸州ではアフリカ系の票は死票となることが多い。カリフォルニア(7%)、テキサス(18%)、ニューヨーク(18%)など選挙人の多い州のアフリカ系人口は南部諸州に比べて低い。2000年の選挙戦で、アフリカ系の利益に言及したのは、ブッシュ、ゴア共に黒人組織の総会での1回のみであった。彼らがマイノリティの利益を重視していたとは言い難い。これが主張の概要である⁴⁶。

しかしこの反論はやや強引な印象を免れず、多くの疑問

が残る。アフリカ系の人口比率ではなく人数で見れば、そしてヒスパニックなど他の人種マイノリティを加えれば、白人マジョリティとは異なる立場の多くの有権者の意向を反映する機会が確保されていることは事実ではないか。そして彼らの投票が大きな選挙人団により選挙人投票に転換されることは、マイノリティの権利保護への力となるのではないか。ゴアは、詩人トニ・モリソンに「初の黒人大統領」とまで称されたビル・クリントンの副大統領であり、ゴア自身もアフリカ系に圧倒的な人気を誇っていた⁴⁷。副大統領として直近の2回の大統領選挙で、カリフォルニアでは民主党が80%超の票を獲得していた。敢えてアフリカ系の利益に特化したアピールを行う必要性は薄かったことであろう。ブッシュはアフリカ系に対する主張は強くなかったかもしれないが、地元テキサスでヒスパニック票を獲得することには熱心だった。両者が人種的マイノリティに無関心だったという主張には無理がある。

別の観点から、選挙人団制度により守られるものとして、州や地域の利益が挙げられる。勝者総取り制のため、候補者たちは一般投票において大差で勝つ必要はなく、できるだけ多くの州で効率よく勝利を得ることを望む。自分の支持層だけに依存すれば勝利は望めないのが、候補者たちは選挙戦期間中、広く全米を巡って選挙運動を行う。選挙人制度支持派はこのように主張する⁴⁸。そうは言っても各州での遊説回数には偏りがあり、訪問先は激戦州を中心に特定の州に限られる。2020年の選挙戦の例を見ると、両党の候補者たちの各州への訪問回数は下記のとおりであった(表3参照)。

候補者たちは激戦州を繰り返し訪れているが、確実な州や小州の訪問は少ない。この結果からは、遊説という形の選挙活動が全国で満遍なく行われているとは言えない。ただし、メディアを通じた選挙戦が重要性を増す中で、候補者の訪問回数が少ないことのみをもって、確実な州や小州の利益が顧みられていないと結論づけることも、また拙速である。ここでは事実の指摘のみにとどめておきたい。

選挙人団制度もまたアメリカ政治の基盤となる「抑制と均衡」(checks and balances)という精巧な権力統制の仕組みの一部である⁴⁹。そのことを無視して選挙人団のみを排除するならば、その影響は政治制度全体に及ぶ⁵⁰。このような主張も傾聴に値するであろう。

そのうえで最後に、選挙人団制度に関わる代表的な改革案を整理しておく。様々なバリエーションはあるが、次の3種類に大別することができる。第一に、全米を単位とする一般投票である。直接選挙への転換であり、選挙人団の

表3 2020年選挙戦（9月1日～11月3日） 大統領候補者と副大統領候補者の州別訪問回数

STATE		DEMOCRAT		REPUBLICAN		STATE		DEMOCRAT		REPUBLICAN	
		Biden	Harris	Trump	Pence			Biden	Harris	Trump	Pence
AK	Alaska	2	2	4	5	MT	Montana				
AL	Alabama					NC	North Carolina	3	5	10	8
AR	Arkansas					ND	North Dakota				
AZ	Arizona					NE	Nebraska			2	
CA	California		1			NH	New Hampshire			1	2
CO	Colorado					NJ	New Jersey				
CT	Connecticut					NM	New Mexico				
DC	District of Columbia					NV	Nevada	1	3	5	2
DE	Delaware	1				NY	New York	1			1
FL	Florida	7	6	12	5	OH	Ohio	5	1	4	4
GA	Georgia	2	2	3	1	OK	Oklahoma				
HI	Hawaii					OR	Oregon				
IA	Iowa	1		2	3	PA	Pennsylvania	18	4	16	7
ID	Idaho					RI	Rhode Island				
IL	Illinois					SC	South Carolina				1
IN	Indiana				2	SD	South Dakota				
KS	Kansas					TN	Tennessee	1		1	
KY	Kentucky					TX	Texas		3		
LA	Louisiana					UT	Utah		2		1
MA	Massachusetts					VA	Virginia		1	1	1
MD	Maryland					VT	Vermont				
ME	Maine				1	WA	Washington				
MI	Michigan	8	6	7	3	WI	Wisconsin	6	2	7	4
MN	Minnesota	2		3	2	WV	West Virginia				
MO	Missouri					WY	Wyoming				
MS	Mississippi										
Total								58	38	78	53

※州内別都市への移動はそれぞれを1回として数える
Chicago Tribune, November 5, 2020より作成

廃止が前提となる。第二に、比例代表の原則で各州の選挙人を候補者に分配する方法である。選挙人制度は残しつつ、より一般投票に近い結果が選挙人投票に反映されるという利点がある。第三に、州内の小選挙区で選挙を行う地区分割制である。具体的には、州内を下院選挙区で分けて選挙を実施し、各選挙区の勝者に1人、全州の勝者に2人の選挙人を与える。州よりも小さい単位で住民の意向を結果に反映できるうえ、そこに州全体の意向を上乗せできるという利点がある。メインとネブラスカの2州はすでにこの方法を採用している。

ここでは、直近3回の選挙結果に地区分割案を適用すると下記のような状況になる（表4参照）。それぞれの選挙について左欄に実際の選挙人獲得数、右欄に地区分割案に

より得られる選挙人獲得数を記している。いずれの選挙も勝者が変わることはないが、2020年では29人、2016年では20人、2012年では60人の選挙人票が民主党から共和党へと移動することになり共和党に有利な変化が生じる。

このような結果が生じるのは各州の下院選挙区を定める線引きの事情と関係がある。1965年投票権法の制定以来、人種マイノリティの居住分布を考慮した区割りが行われるようになり、その副次的結果として白人マジョリティが安定的に多数を占める選挙区も多く出現した。各州への下院議席の配分とそれに応じた選挙区再編は10年ごとの国勢調査の結果をふまえて実施される。そして2010年国勢調査に基づく連邦下院の選挙区改正は共和党に有利に作用しているという分析結果がある⁵¹。

表4 2020年、2016年、2012年選挙結果 地区分割案を採用した場合との対比

	State	Electors	2020 Actual		2020 District Plan		2016 Actual		2016 District Plan		2012 Actual		2012 District Plan	
			Biden	Trump	Biden	Trump	Clinton	Trump	Clinton	Trump	Obama	Romney	Obama	Romney
AK	Alaska	3		3	0	3		3	0	3		3	0	3
AL	Alabama	9		9	1	8		9	1	8		9	1	8
AR	Arkansas	6		6	0	6		6	0	6		6	0	6
AZ	Arizona	11	11		7	4		11	4	7		11	3	8
CA	California	55	55		48	7	55		48	7	55		43	12
CO	Colorado	9	9		6	3	9		6	3	9		6	3
CT	Connecticut	7	7		7	0	7		7	0	7		7	0
DC	District of Columbia	3	3		3	0	3		3	0	3		3	0
DE	Delaware	3	3		3	0	3		3	0	3		3	0
FL	Florida	29		29	12	17		29	13	16	29		15	14
GA	Georgia	16	16		8	8		16	4	12		16	4	12
HI	Hawaii	4	4		4	0	4		4	0	4		4	0
IA	Iowa	6		6	0	6		6	0	6	6		5	1
ID	Idaho	4		4	0	4		4	0	4		4	0	4
IL	Illinois	20	20		14	6	20		13	7	20		14	6
IN	Indiana	11		11	2	9		11	2	9		11	2	9
KS	Kansas	6		6	1	5		6	1	5		6	0	6
KY	Kentucky	8		8	1	7		8	1	7		8	1	7
LA	Louisiana	8		8	1	7		8	1	7		8	1	7
MA	Massachusetts	11	11		11	0	11		11	0	11		11	0
MD	Maryland	10	10		9	1	10		9	1	10		9	1
ME	Maine	4	3	1	3	1	3	1	3	1	4		4	0
MI	Michigan	16	16		8	8		16	5	11	16		7	9
MN	Minnesota	10	10		6	4	10		5	5	10		8	2
MO	Missouri	10		10	2	8		10	2	8		10	2	8
MS	Mississippi	6		6	1	5		6	1	5		6	1	5
MT	Montana	3		3	0	3		3	0	3		3	0	3
NC	North Carolina	15		15	5	10		15	5	10		15	5	10
ND	North Dakota	3		3	0	3		3	0	3		3	0	3
NE	Nebraska	5	1	4	1	4		5	0	5		5	0	5
NH	New Hampshire	4	4		4	0	4		3	1	4		4	0
NJ	New Jersey	14	14		11	3	14		9	5	14		10	4
NM	New Mexico	5	5		4	1	5		4	1	5		4	1
NV	Nevada	6	6		5	1	6		4	2	6		5	1
NY	New York	29	29		22	7	29		20	9	29		26	3
OH	Ohio	18		18	4	14		18	4	14	18		6	12
OK	Oklahoma	7		7	0	7		7	0	7		7	0	7
OR	Oregon	7	7		6	1	7		6	1	7		6	1
PA	Pennsylvania	20	20		11	9		20	8	12	20		11	9
RI	Rhode Island	4	4		4	0	4		4	0	4		4	0
SC	South Carolina	9		9	1	8		9	1	8		9	1	8
SD	South Dakota	3		3	0	3		3	0	3		3	0	3
TN	Tennessee	11		11	2	9		11	2	9		11	2	9
TX	Texas	38		38	14	24		38	14	24		38	11	27
UT	Utah	6		6	0	6		6	0	6		6	0	6
VA	Virginia	13	13		9	4	13		7	6	13		6	7
VT	Vermont	3	3		3	0	3		3	0	3		3	0
WA	Washington	12	12		9	3	12		9	3	12		9	3
WI	Wisconsin	10	10		4	6		10	2	8	10		5	5
WV	West Virginia	5		5	0	5		5	0	5		5	0	5
WY	Wyoming	3		3	0	3		3	0	3		3	0	3
Total			306	232	277	261	232	306	252	286	332	206	272	266

網掛けは地区分割案の採用により得られる選挙人を表す

Daily Kos の編纂による各州の公式選挙結果（付表）を基に試算

<https://www.dailykos.com/stories/2020/11/19/1163009/-Daily-Kos-Elections-presidential-results-by-congressional-district-for-2020-2016-and-2012>

結

建国者たちは人口の多い州と少ない州の公平性に配慮し、また特定の州や地域に支持が偏在する候補者が選出されないよう細心の注意を払って、大統領選挙制度を設計した。しかし現在のアメリカ社会の政治環境は、政党が存在しなかった建国当時とは様変わりしている。大州と小州の対立や特定の州や地域の利害は国民統合の主要な障害ではなくなり、政治的に最も重要なアイデンティティは支持政党によるものである⁵²。アメリカの政治的対立は赤（共和党）と青（民主党）の全国規模の色分けで表され、各州の内部にも双方の勢力が混在している。「赤い州」「青い州」とはいうものの、大統領選挙で一方の政党の候補者が他方を倍以上の得票率で圧倒する事例は少数の州に限られている⁵³。このように全国的規模での二大政党制が定着した現在、当初は想定されなかった制度上の不合理が、アメリカ国民の批判の的となっている。

建国者たちによる制度設計は、憲法制定時には全体として十分な整合性を持っていたが、今やその全ての論点について同時に整合性を確保することは困難となった。州間の平等、あるいは州間の平等と有権者の平等の両立といった諸問題を前に、現代の論者たちは建国者の思想をふまえて持論を展開するが、問題意識の所在が異なっているため、それらの議論はすれ違ひにならざるをえない。

このような現状について本稿では、公平原理をめぐる論点を中心に概観し、議論の根拠について整理と検証を行った。選挙制度に公正で民主的な理論上の枠組みが確保されることを前提としたうえで、現実の改革議論においては、改革が誰を利するのかという思惑が大きく作用する。現行制度には共和党と民主党のいずれの支持者にとっても不満を生じる余地が存在するが、改革指向が強いのは民主党側のようなものである。

2020年8月から9月にかけて実施されたギャラップ調査によれば、全米の一般投票で最多得票の候補者を選挙の勝者とする憲法修正に賛成するアメリカ人は成人全体の61%に上り、選挙人投票によって勝者を決定する現行制度の維持を支持する38%を大きく上回っている（表5参照）⁵⁴。しかしその賛否は支持政党によって大きく異なっており、民主党支持者はその大半が制度改革に賛成であるのに対し、共和党支持者は現状維持派が圧倒している。

制度改革に対するこのような両党支持者の姿勢は、近年の選挙の結果に照らして考えれば理解しやすい。2000年選挙と2016年選挙で一般投票の得票数で下回る選挙人投票で勝利したのは、いずれも共和党候補者であった。そしてこのような結果は、両党の支持基盤の広がり非対称に由来することが明らかになりつつある。経済誌エコノミストが行ったシミュレーションによれば、一般投票と選挙人投票の逆転という現象は、一般投票の全国合計で民主党候補者が上回った場合に発生する可能性が高く、共和党候補者が上回った場合に発生する可能性はきわめて低い⁵⁵。

選挙人制度の改革には党派を超えた共通理解と合意が必要であり、改革が共和党と民主党の支持者の双方の利点をもたらすと説くことによってその実現をめざす主張もある⁵⁶。現実には両党の隔たりは大きいだが、現状を問題視することでは共通点もある。トランプは既存の政治体制や制度を批判し、その影響力は大統領退任後の現在も残る。そしてそのトランプ時代に大きく変質した共和党の現況を憂い「現在の共和党は社会への脅威である」⁵⁷とまで断言する論者も存在するほど、リベラル派の危機感も深刻化している。2016年選挙と2020年選挙の動乱を経て、今後は選挙制度改革自体が政治的争点として浮上する可能性もあるのではないかと。選挙人団の扱いはその中核となる問題であり、議論の行方が注目される。

註

表5 大統領選挙制度改革に対する賛否

	Amend Constitution (憲法を修正すべき) %	Keep Current System (現行制度に賛成) %
Total U.S. adults	61	38
Republicans	23	77
Independents	68	31
Democrats	89	10
Gallup, August 31 - September 13, 2020		

出典：Megan Brennan, “61% of Americans Support Abolishing Electoral College,” Gallup, September 24, 2020.

- 1990年代における議論の動向については下記を参照。鈴木健司「アメリカ合衆国大統領選挙制度をめぐる議論の諸相」『同志社女子大学学術研究年報』43 III (1992) 25-43.
- 当時下記の記事などが、選挙後に起こりうる様々な混乱の可能性を指摘していた。Barton Gellman, “The Election That Could Break America.” *The Atlantic*, November 2020. 46-59.
- 例外として、メイン州とネブラスカ州は地区分割制を

- 採用している。本文で後述する。
- 4 U.S. Constitution, art. 2, sec. 1, cl. 2. 邦訳は在日米国大使館による (以下同様)。
 - 5 独立宣言採択から合衆国憲法発効までの時期については state に「邦」という訳語を当てて憲法発効後の「州」と区別することがアメリカ史の記述の慣例であるので、ここではそれに従っている。この訳語に関しては下記の文献などを参照。本間長世『共和国の誕生—ワシントンと建国の理念』(NTT 出版、2006年) 158.
 - 6 マディソンは憲法が州権を強いものとして規定している理由について次のように述べている。「人民が第一の最も自然な愛着を向けるのが各自の政府に対してであるということは、多くの考察から疑う余地のないことと思われる」。James Madison. Federalist No.46: “The Influence of the State and Federal Governments Compared.” *New York Packet*, January 29, 1788.
 - 7 James Madison, Federalist No.10: “The Same Subject Continued: The Union as a Safeguard Against Domestic Faction and Insurrection,” *New York Packet*, November 23, 1787.
 - 8 Alexander Hamilton, Federalist No.68: “The Mode of Electing the President,” *New York Packet*, March 14, 1788.
 - 9 このように議会を議員配分方法の異なる二院制とすること自体が、人口の多い州と少ない州の妥協の結果である。
 - 10 Hamilton, Federalist No.68.
 - 11 Thomas Jefferson, Inaugural Address, Washington DC, March 4, 1800.
 - 12 James W. Ceaser, *Presidential Selection: Theory and Development* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1979) 90.
 - 13 ジャクソンは大統領として最初の年次教書で大統領選挙制度の改革の必要性を訴え、選挙人制度の廃止や、州の権限を保持したうえで過半数が得られない場合は上位2名による決選投票を行うことなどを提案している。Andrew Jackson, Annual Message to Congress, December 8, 1828.
 - 14 Joseph E. Kallenbach, “Recent Proposals to Reform the Election College System,” *The American Political Science Review* 30 no. 5 (October 1936): 924.
 - 15 George C. Edwards III, *Why Electoral College Is Bad for America*, 3rd ed. (New Haven, CT: Yale University Press, 2019) 3.
 - 16 Paul Leland Haworth, *The Hayes-Tilden Disputed Presidential Election of 1876*. (Cleveland: Burrows) 1906. 340-342. 同選挙の事情について、新しい文献では下記の記述が詳しい。Foley, Edward B. *Ballot Battles: The History of Disputed Elections in the United States*. (New York: Oxford University Press, 2016) 117-149.
 - 17 James L. Baumgardner, “The 1888 Presidential Election: How Corrupt?” *Presidential Studies Quarterly* 14 no. 3. (Summer 1984): 421-422.
 - 18 A. W. Geiger, “For Many Voters, It’s Not Which Presidential Candidate They’re For But Which They’re Against,” Pew Research Center, September 2, 2016. <https://www.pewresearch.org/fact-tank/2016/09/02/for-many-voters-its-not-which-presidential-candidate-theyre-for-but-which-theyre-against/> (accessed August 30, 2021).
 - 19 Gallup, “Presidential Approval Ratings: Donald Trump.” <https://news.gallup.com/poll/203198/presidential-approval-ratings-donald-trump.aspx> (accessed August 30, 2021).
 - 20 Tara Ross, *Why We Need the Electoral College* (Washington DC: Regnery Gateway, 2017) 54.
 - 21 2010年国勢調査による。
 - 22 カリフォルニア州における民主党候補者と共和党候補者の得票数の差は、2012年(オバマ対ロムニー)では約301万票、2020年(バイデン対トランプ)では約510万票であった。
 - 23 Ross, 57.
 - 24 Ronald Brownstein, “How the Rustbelt Paved Trump’s Road to Victory,” *The Atlantic*, November 10, 2016. <https://www.theatlantic.com/politics/archive/2016/11/trumps-road-to-victory/507203/> (accessed August 30, 2021).
 - 25 U.S. Constitution amend. 12
 - 26 国勢調査局が示した2014年の推計値による。United States Census Bureau, “Selected Characteristics of the Native and Foreign-Born Populations” (2014).

- 27 Leonard Steinhorn, "Without Voting, Noncitizens Could Swing the Election for Obama." *Washington Post*, October 5, 2012. <https://www.nbcnews.com/politics/elections/2000-bill-bradley-makes-play-african-american-support-challenging-gore-n1029611> (accessed August 22, 2021).
- 28 Nate Cohn, "How to Explain Split Between Popular Vote and Electoral Vote." *New York Times*, December 20, 2016. 48 Ross, 34.
- 29 George C. Edwards III, *Why Electoral College Is Bad for America*, 3rd ed. (New Haven, CT: Yale University Press) 2019. 50. 49 Nelson W. Polsby, Aaron Wildavsky, Steven E. Schier, and David A. Hopkins. *Presidential Elections: Strategies and Structures of American Electoral Politics*, 13th ed. (Lanham, MD: Rowman and Littlefield, 2012.) 237.
- 30 U.S. Constitution, art. 1, sec. 2, cl. 3. 市民権、法の適正な過程、平等権を定めた修正第14条が1868年に成立したことに伴い廃止された。 50 Ross, 32.
- 31 Federal Election Commission, "Official 2020 Presidential General Election Results" (Washington, D.C., January 28, 2021). 51 Alan I. Abramowitz, "Partisan Gerrymandering and the Outlook for the 2018 U.S. House Elections," *Sabato's Crystal Ball*, University of Virginia Center for Politics, (December 14, 2017). <https://centerforpolitics.org/crystalball/articles/partisan-gerrymandering-and-the-outlook-for-the-2018-u-s-house-elections/> (accessed August 22, 2021).
- 32 Federal Election Commission, *Federal Election 2000: Election Results for the U.S. President, the U.S. Senate and the U.S. House of Representatives*. (Washington, D.C., June 2001). 52 Ezra Klein, *Why We're Polarized* (London: Profile Books), 259.
- 33 Edwards, 164. 53 首都ワシントンDCでは、民主党候補者が90%前後の得票率で勝利することが常態化している。2020年選挙ではバイデンが92%を獲得してトランプに85ポイント差を付けた。それ以外ではワイオミング州でトランプが70%を獲得して43ポイント差を付けたのが最大であり、得票率で倍以上の差が生じたのは両候補4州ずつ(首都含む)に留まった。
- 34 Ross, 125-129. 54 Megan Brenan, "61% of Americans Support Abolishing Electoral College," *Gallup*, September 24, 2020. <https://news.gallup.com/poll/320744/americans-support-abolishing-electoral-college.aspx> (accessed August 30, 2021).
- 35 U.S. Constitution, amend. 12. 55 Graphic Detail, *The Economist*. (June 12, 2020). <https://www.economist.com/graphic-detail/2020/06/12/americas-anachronistic-electoral-college-gives-republicans-an-edge> (accessed August 22, 2021).
- 36 U.S. Constitution, amend. 20, cl. 3. 56 James W. Lucas, *Fifty States, Not Six: A Bipartisan Approach to Reforming the Electoral College and Assuring That Every Citizen's Vote Counts*. Revised ed. (N.p.: Constitution Renewal Initiative, 2018) 37-52.
- 37 Ross, 173-180. Appendix D より。
- 38 *McPherson v. Blacker*, 146 U.S. 1 (1892).
- 39 *Ray v. Blair*, 343 U.S. 214 (1952).
- 40 *Chiafalo v. Washington*, 591 U.S. ___ (2020).
- 41 Rick Anderson, "Three Washington State Democratic Electors Vote for Colin Powell, One for Faith Spotted Eagle." *Los Angeles Times*, December 19, 2016.
- 42 Hamilton. *Federalist No.68*.
- 43 U.S. Constitution, amend. 12.
- 44 Edwards, 163.
- 45 代表的なものとして下記の文献などがある。Edward B. Foley, *Presidential Election and Majority Rule: The Rise, Demise, and Potential Restoration of the Jeffersonian Electoral College*. (New York: Oxford University Press, 2020).
- 46 Edwards, 145-146.
- 47 Steve Kornacki, "2000: Bill Bradley Makes a Play for African American Support in Challenging Gore," *NBC News*, July 29, 2019.

57 Charles M. Blow, "The G.O.P. Menace to Society," *New York Times*, August 1, 2021.

参考文献

Abramowitz, Alan I. "Partisan Gerrymandering and the Outlook for the 2018 U.S. House Elections," Sabato's Crystal Ball, University of Virginia Center for Politics, December 14, 2017. <https://centerforpolitics.org/crystalball/articles/partisan-gerrymandering-and-the-outlook-for-the-2018-u-s-house-elections/> (accessed August 22, 2021).

Baumgardner, James L. "The 1888 Presidential Election: How Corrupt?" *Presidential Studies Quarterly* 14 no. 3. (Summer 1984): 416-427.

Blow, Charles M. "The G.O.P. Menace to Society," *New York Times*, August 1, 2021.

Brownstein, Ronald. "How the Rustbelt Paved Trump's Road to Victory," *The Atlantic*, November 10, 2016. <https://www.theatlantic.com/politics/archive/2016/11/trumps-road-to-victory/507203/> (accessed August 29, 2021).

Burden, Barry C., and Charles Stewart III., eds. *The Measure of American Elections*. New York: Cambridge University Press, 2014.

Ceaser, James W. *Presidential Selection: Theory and Development*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 1979.

Cohn, Nate. "How to Explain Split Between Popular Vote and Electoral Vote." *New York Times*, December 20, 2016.

Edwards III, George C. *Why Electoral College Is Bad for America*, 3rd ed. New Haven, CT: Yale University Press, 2019.

Foley, Edward B. *Ballot Battles: The History of Disputed Elections in the United States*. New York: Oxford University Press, 2016.

Foley, Edward B. *Presidential Election and Majority Rule: The Rise, Demise, and Potential Restoration of the Jeffersonian Electoral College*. New York: Oxford University Press, 2020.

Fortier, John G. ed. *After the People Vote: A Guide to the Electoral College*, 4th ed. Washington DC:

AEI Press, 2020.

Gellman, Barton. "The Election That Could Break America." *The Atlantic*, November 2020. 46-59.

Graphic Detail. *The Economist*, June 12, 2020. <https://www.economist.com/graphic-detail/2020/06/12/americas-anachronistic-electoral-college-gives-republicans-an-edge> (accessed August 22, 2021).

Haworth, Paul Leland, *The Hayes-Tilden Disputed Presidential Election of 1876*. Cleveland: Burrows, 1906.

Hill, Steven. *Fixing Elections: The Failure of America's Winner Take All Politics*. New York: Routledge, 2002.

Kallenbach, Joseph E. "Recent Proposals to Reform the Election College System." *The American Political Science Review* 30 no. 5 (October 1936) 924-929.

Klein, Ezra. *Why We're Polarized*. London: Profile Books, 2020.

Kornacki, Steve. "2000: Bill Bradley Makes a Play for African American Support in Challenging Gore," NBC News, July 29, 2019. <https://www.nbcnews.com/politics/elections/2000-bill-bradley-makes-play-african-american-support-challenging-gore-n1029611> (accessed August 22, 2021).

Lucas, James W. *Fifty States, Not Six: A Bipartisan Approach to Reforming the Electoral College and Assuring That Every Citizen's Vote Counts*. Revised ed. N.p.: Constitution Renewal Initiative, 2018.

McDougall, Walter A. "The Slippery Statistics of the Popular Vote." *New York Times*, November 16, 2000.

Michener, James A. *Presidential Lottery: The Reckless Gamble in Our Electoral System*. New York: Random House, 1969. Reprint. New York: Dial Press, 2016.

Nivola, Pietro S. and David W. Brady, ed. *Red and Blue Nation? Characteristics and Causes of America's Polarized Politics*. Washington DC: Brookings Institution Press, 2006.

Polsby, Nelson W., Aaron Wildavsky, Steven E.

Schier, and David A. Hopkins. *Presidential Elections: Strategies and Structures of American Electoral Politics*, 13th ed. Lanham, MD: Rowman and Littlefield, 2012.

Ross, Tara. *Why We Need the Electoral College*. Washington DC: Regnery Gateway, 2017.

Schumaker, Paul. *The Twenty-eighth Amendment? Beyond Abolishing the Electoral College*. Columbus, OH: Gatekeeper Press, 2020.

Steinhorn, Leonard. "Without Voting, Noncitizens Could Swing the Election for Obama." *Washington Post*, October 5, 2012.

Tran, Dari Sylvester. *Unrigging American Elections: Reform Past and Prologue*. London: Palgrave Macmillan, 2019.

Zacharias, Jared, ed. *Amendment XII: Presidential Election Process*. Farmington Hills, MI: Greenwood Press, 2009.

Congressional Research Service "The Electoral College: How It Works in Contemporary Presidential Elections," May 15, 2017.

"The Electoral College System: Constitutional Basis and How It Works." *Congressional Digest: A Pro & Con Monthly*. October 2008. 227. 256.

付表 2020年、2016年、2012年 各州地区別選挙結果

	Incumbent	Party	2020				2016				2012				
			Biden	Trump	Biden	Trump	Clinton	Trump	Clinton	Trump	Obama	Romney	Obama	Romney	
AK-AL	Don Young	(R)	43.0	53.1	-10.1	1	37.6	52.8	-15.2	1	41.2	55.3	-14.1	1	
AK	Alaska		42.8%	52.8%		2	36.6%	51.3%		2	40.8%	54.8%		2	
AK	Alaska					0				3				0	3
AL-01	Jerry Carl	(R)	35.3	63.7	-28.4	1	34.1	63.5	-29.4	1	37.4	61.8	-24.4	1	
AL-02	Barry Moore	(R)	35.1	63.9	-28.8	1	33.0	64.9	-31.9	1	36.4	62.9	-26.5	1	
AL-03	Mike Rogers	(R)	33.7	65.3	-31.6	1	32.3	65.3	-33.0	1	36.8	62.3	-25.5	1	
AL-04	Robert Aderholt	(R)	17.8	81.2	-63.4	1	17.4	80.4	-63.0	1	24.0	74.8	-50.8	1	
AL-05	Mo Brooks	(R)	35.7	62.7	-27.0	1	31.3	64.7	-33.4	1	34.9	63.9	-29.0	1	
AL-06	Gary Palmer	(R)	31.8	67.0	-35.2	1	26.1	70.8	-44.7	1	24.7	74.3	-49.6	1	
AL-07	Terri Sewell	(D)	70.8	28.5	42.3	1	69.8	28.6	41.2	1	72.4	27.1	45.3	1	
AL	Alabama		36.6%	62.0%		2	34.4%	62.1%		2	38.4%	60.5%		2	
AL	Alabama					1				8				1	8
AR-01	Rick Crawford	(R)	27.9	69.1	-41.2	1	30.2	65.0	-34.8	1	36.3	61.0	-24.7	1	
AR-02	French Hill	(R)	44.3	53.1	-8.8	1	41.7	52.4	-10.7	1	42.9	54.7	-11.8	1	
AR-03	Steve Womack	(R)	35.2	61.9	-26.7	1	30.5	61.9	-31.4	1	31.6	65.5	-33.9	1	
AR-04	Bruce Westerman	(R)	29.6	67.7	-38.1	1	31.3	64.2	-32.9	1	35.9	61.8	-25.9	1	
AR	Arkansas		34.8%	62.4%		2	33.7%	60.6%		2	36.9%	60.6%		2	
AR	Arkansas					0				6				0	6
AZ-01	Tom O'Halleran	(D)	50.1	48.4	1.7	1	46.6	47.7	-1.1	1	47.9	50.4	-2.5	1	
AZ-02	Ann Kirkpatrick	(D)	54.5	43.9	10.6	1	49.6	44.7	4.9	1	48.4	49.9	-1.5	1	
AZ-03	Raul Grijalva	(D)	62.8	35.7	27.1	1	62.4	32.5	29.9	1	61.4	36.9	24.5	1	
AZ-04	Paul Gosar	(R)	30.6	68.0	-37.4	1	27.5	67.7	-40.2	1	31.0	67.2	-36.2	1	
AZ-05	Andy Biggs	(R)	41.9	56.5	-14.6	1	36.5	57.6	-21.1	1	34.6	63.8	-29.2	1	
AZ-06	David Schweikert	(R)	47.3	51.4	-4.1	1	42.4	52.4	-10.0	1	38.8	59.5	-20.7	1	
AZ-07	Ruben Gallego	(D)	73.7	24.7	49.0	1	71.8	22.6	49.2	1	71.7	26.5	45.2	1	
AZ-08	Debbie Lesko	(R)	41.4	57.3	-15.9	1	37.0	58.1	-21.1	1	36.9	61.7	-24.8	1	
AZ-09	Greg Stanton	(D)	60.8	37.3	23.5	1	54.7	38.4	16.3	1	51.1	46.6	4.5	1	
AZ	Arizona		49.4%	49.1%		2	45.1%	48.7%		2	44.6%	53.7%		2	
AZ	Arizona					7				4				3	8
CA-01	Doug LaMalfa	(R)	41.1	56.4	-15.3	1	36.5	56.2	-19.7	1	40.3	56.6	-16.3	1	
CA-02	Jared Huffman	(D)	73.7	23.9	49.8	1	69.0	23.3	45.7	1	69.0	27.0	42.0	1	
CA-03	John Garamendi	(D)	54.9	42.7	12.2	1	53.0	40.4	12.6	1	54.3	43.1	11.2	1	
CA-04	Tom McClintock	(R)	44.0	53.7	-9.7	1	39.3	54.0	-14.7	1	39.5	57.9	-18.4	1	
CA-05	Mike Thompson	(D)	72.5	25.3	47.2	1	69.2	24.3	44.9	1	69.7	27.5	42.2	1	
CA-06	Doris Matsui	(D)	70.3	27.2	43.1	1	69.2	24.4	44.8	1	69.1	28.3	40.8	1	
CA-07	Ami Bera	(D)	55.7	41.9	13.8	1	52.3	40.9	11.4	1	50.8	46.8	4.0	1	
CA-08	Jay Obernolte	(R)	43.6	54.1	-10.5	1	39.6	54.7	-15.1	1	41.7	55.6	-13.9	1	
CA-09	Jerry McNerney	(D)	57.9	39.9	18.0	1	56.6	38.0	18.6	1	57.8	40.1	17.7	1	
CA-10	Josh Harder	(D)	50.3	47.4	2.9	1	48.5	45.5	3.0	1	50.6	47.0	3.6	1	
CA-11	Mark DeSaulnier	(D)	74.3	23.6	50.7	1	71.5	22.7	48.8	1	67.6	30.0	37.6	1	
CA-12	Nancy Pelosi	(D)	86.1	11.9	74.2	1	86.2	8.7	77.5	1	84.1	12.5	71.6	1	
CA-13	Barbara Lee	(D)	88.9	9.0	79.9	1	87.4	6.8	80.6	1	87.5	9.0	78.5	1	
CA-14	Jackie Speier	(D)	77.7	20.5	57.2	1	76.9	18.2	58.7	1	74.2	23.6	50.6	1	
CA-15	Eric Swalwell	(D)	71.5	26.4	45.1	1	69.9	24.2	45.7	1	68.0	29.8	38.2	1	
CA-16	Jim Costa	(D)	58.8	38.9	19.9	1	58.0	36.4	21.6	1	58.6	39.4	19.2	1	
CA-17	Ro Khanna	(D)	72.5	25.6	46.9	1	73.9	20.5	53.4	1	71.9	25.5	46.4	1	
CA-18	Anna Eshoo	(D)	76.4	21.3	55.1	1	73.4	20.2	53.2	1	68.2	28.9	39.3	1	
CA-19	Zoe Lofgren	(D)	70.0	27.9	42.1	1	72.9	21.5	51.4	1	71.2	26.5	44.7	1	
CA-20	Jimmy Panetta	(D)	72.7	25.0	47.7	1	70.4	23.2	47.2	1	70.9	26.2	44.7	1	
CA-21	David Valadao	(R)	54.4	43.5	10.9	1	55.2	39.7	15.5	1	54.6	43.5	11.1	1	
CA-22	Devin Nunes	(R)	46.2	51.7	-5.5	1	42.6	52.1	-9.5	1	41.6	56.6	-15.0	1	
CA-23	Kevin McCarthy	(R)	40.5	57.1	-16.6	1	36.1	58.1	-22.0	1	36.1	61.5	-25.4	1	
CA-24	Salud Carbajal	(D)	60.7	36.9	23.8	1	56.7	36.5	20.2	1	54.1	43.1	11.0	1	
CA-25	Mike Garcia	(R)	54.0	43.9	10.1	1	50.3	43.6	6.7	1	47.9	49.7	-1.8	1	
CA-26	Julia Brownley	(D)	61.4	36.5	24.9	1	57.9	36.0	21.9	1	54.0	43.7	10.3	1	
CA-27	Judy Chu	(D)	67.2	30.8	36.4	1	66.0	28.4	37.6	1	62.6	35.0	27.6	1	
CA-28	Adam Schiff	(D)	70.9	27.2	43.7	1	72.1	22.3	49.8	1	70.3	26.5	43.8	1	
CA-29	Tony Cardenas	(D)	74.1	23.7	50.4	1	77.7	16.8	60.9	1	77.0	20.5	56.5	1	
CA-30	Brad Sherman	(D)	68.7	29.4	39.3	1	69.1	25.7	43.4	1	65.3	32.1	33.2	1	
CA-31	Pete Aguilar	(D)	58.8	38.9	19.9	1	57.7	36.6	21.1	1	57.2	40.6	16.6	1	
CA-32	Grace Napolitano	(D)	65.2	32.8	32.4	1	66.6	27.7	38.9	1	65.2	32.5	32.7	1	
CA-33	Ted Lieu	(D)	69.0	29.0	40.0	1	67.8	26.5	41.3	1	60.6	36.8	23.8	1	
CA-34	Jimmy Gomez	(D)	80.8	16.9	63.9	1	83.6	10.7	72.9	1	83.0	14.1	68.9	1	

CA-35	Norma Torres	(D)	65.1	32.6	32.5	1	67.7	26.9	40.8	1	67.4	30.6	36.8	1
CA-36	Raul Ruiz	(D)	55.9	42.3	13.6	1	52.2	43.4	8.8	1	50.7	47.5	3.2	1
CA-37	Karen Bass	(D)	84.3	13.8	70.5	1	85.7	9.6	76.1	1	84.9	12.7	72.2	1
CA-38	Linda Sánchez	(D)	65.6	32.3	33.3	1	67.0	27.4	39.6	1	64.9	33.0	31.9	1
CA-39	Young Kim	(R)	54.1	44.0	10.1	1	51.5	42.9	8.6	1	47.1	50.8	-3.7	1
CA-40	Lucille Roybal-A	(D)	77.1	20.6	56.5	1	82.2	12.8	69.4	1	81.5	16.5	65.0	1
CA-41	Mark Takano	(D)	61.7	36.1	25.6	1	61.0	33.1	27.9	1	61.5	36.3	25.2	1
CA-42	Ken Calvert	(R)	45.4	52.7	-7.3	1	41.4	53.4	-12.0	1	41.4	56.5	-15.1	1
CA-43	Maxine Waters	(D)	76.9	20.9	56.0	1	78.4	16.7	61.7	1	78.0	20.0	58.0	1
CA-44	Nanette Barragán	(D)	78.4	19.2	59.2	1	83.0	12.3	70.7	1	84.7	13.6	71.1	1
CA-45	Katie Porter	(D)	54.6	43.3	11.3	1	49.8	44.4	5.4	1	43.0	54.8	-11.8	1
CA-46	Lou Correa	(D)	64.3	33.5	30.8	1	66.3	27.9	38.4	1	61.4	36.2	25.2	1
CA-47	Alan Lowenthal	(D)	62.5	35.3	27.2	1	62.6	31.0	31.6	1	60.0	37.5	22.5	1
CA-48	Michelle Steel	(R)	49.7	48.3	1.4	1	47.9	46.2	1.7	1	43.0	54.7	-11.7	1
CA-49	Mike Levin	(D)	55.2	42.5	12.7	1	50.7	43.2	7.5	1	45.7	52.2	-6.5	1
CA-50	Darrell Issa	(R)	45.0	52.7	-7.7	1	39.6	54.6	-15.0	1	37.6	60.4	-22.8	1
CA-51	Juan Vargas	(D)	66.9	30.9	36.0	1	71.8	22.8	49.0	1	69.4	28.9	40.5	1
CA-52	Scott Peters	(D)	63.4	34.2	29.2	1	58.1	35.6	22.5	1	52.1	45.7	6.4	1
CA-53	Sara Jacobs	(D)	67.0	30.9	36.1	1	64.5	29.6	34.9	1	61.4	36.4	25.0	1
CA	California		63.5%	34.3%		2	61.7%	31.6%		2	60.2%	37.1%		2
CA	California				48	7			48	7			43	12
CO-01	Diana DeGette	(D)	75.6	22.1	53.5	1	69.0	23.2	45.8	1	69.0	28.8	40.2	1
CO-02	Joe Neguse	(D)	63.7	33.6	30.1	1	56.2	34.9	21.3	1	57.9	39.5	18.4	1
CO-03	Lauren Boebert	(R)	46.1	51.6	-5.5	1	40.0	52.0	-12.0	1	45.8	51.8	-6.0	1
CO-04	Ken Buck	(R)	40.8	56.6	-15.8	1	34.3	57.4	-23.1	1	39.2	58.5	-19.3	1
CO-05	Doug Lamborn	(R)	41.8	54.7	-12.9	1	33.2	57.2	-24.0	1	38.3	59.1	-20.8	1
CO-06	Jason Crow	(D)	58.2	39.3	18.9	1	50.2	41.3	8.9	1	51.6	46.5	5.1	1
CO-07	Ed Perlmutter	(D)	60.0	37.1	22.9	1	51.4	39.4	12.0	1	56.1	41.3	14.8	1
CO	Colorado		55.4%	41.9%		2	48.2%	43.3%		2	51.5%	46.1%		2
CO	Colorado				6	3			6	3			6	3
CT-01	John Larson	(D)	63.3	35.3	28.0	1	59.4	36.3	23.1	1	63.3	35.6	27.7	1
CT-02	Joe Courtney	(D)	54.5	43.5	11.0	1	48.7	45.8	2.9	1	55.9	42.6	13.3	1
CT-03	Rosa DeLauro	(D)	59.9	38.8	21.1	1	55.9	40.4	15.5	1	62.9	36.3	26.3	1
CT-04	Jim Himes	(D)	64.2	34.5	29.7	1	59.6	36.6	23.0	1	55.1	44.0	11.1	1
CT-05	Jahana Hayes	(D)	54.6	43.9	10.7	1	49.9	45.8	4.1	1	53.5	45.3	8.2	1
CT	Connecticut		59.3%	39.2%		2	54.6%	40.9%		2	58.1%	40.7%		2
CT	Connecticut				7	0			7	0			7	0
n/a						1				1				1
DC	District of Columbia		92.1%	5.4%		2	90.9%	4.1%		2	90.9%	7.3%		2
DC	District of Columbia				3	0			3	0			3	0
DE-AL	Lisa Blunt Roche	(D)	58.8	39.8	19.0	1	53.4	41.9	11.5	1	58.6	40.0	18.6	1
DE	Delaware		58.7%	39.8%		2	53.1%	41.7%		2	58.6%	40.0%		2
DE	Delaware				3	0			3	0			3	0
FL-01	Matt Gaetz	(R)	32.4	65.9	-33.5	1	28.2	67.5	-39.3	1	30.1	68.5	-38.4	1
FL-02	Neal Dunn	(R)	32.0	67.0	-35.0	1	30.6	66.2	-35.6	1	34.0	64.6	-30.6	1
FL-03	Kat Cammack	(R)	42.8	56.0	-13.2	1	40.2	56.2	-16.0	1	41.9	56.6	-14.7	1
FL-04	John Rutherford	(D)	38.9	59.9	-21.0	1	34.1	62.1	-28.0	1	32.8	66.1	-33.3	1
FL-05	Al Lawson	(R)	62.7	36.2	26.5	1	61.3	35.9	25.4	1	63.6	35.4	28.2	1
FL-06	Michael Waltz	(R)	40.8	58.3	-17.5	1	39.9	56.9	-17.0	1	46.6	52.2	-5.6	1
FL-07	Stephanie Murphy	(D)	54.6	44.2	10.4	1	51.4	44.1	7.3	1	49.4	49.4	0.0	1
FL-08	Bill Posey	(R)	40.6	58.3	-17.7	1	37.7	58.4	-20.7	1	42.1	56.6	-14.5	1
FL-09	Darren Soto	(D)	53.0	46.1	6.9	1	54.8	41.9	12.9	1	55.6	43.4	12.2	1
FL-10	Val Demings	(D)	62.0	37.0	25.0	1	61.8	34.9	26.9	1	60.7	38.4	22.3	1
FL-11	Daniel Webster	(R)	33.8	65.4	-31.6	1	32.5	64.8	-32.3	1	39.8	59.2	-19.4	1
FL-12	Gus Bilirakis	(R)	41.0	57.9	-16.9	1	38.8	57.4	-18.6	1	45.5	53.0	-7.5	1
FL-13	Charlie Crist	(D)	51.5	47.4	4.1	1	49.6	46.4	3.2	1	54.6	43.9	10.7	1
FL-14	Kathy Castor	(D)	57.2	41.6	15.6	1	57.2	39.0	18.2	1	57.6	41.2	16.4	1
FL-15	Scott Franklin	(R)	45.2	53.7	-8.5	1	43.1	53.1	-10.0	1	46.6	52.2	-5.6	1
FL-16	Vern Buchanan	(R)	45.5	53.6	-8.1	1	43.0	53.7	-10.7	1	45.1	53.7	-8.6	1
FL-17	Greg Steube	(R)	35.9	63.3	-27.4	1	35.0	62.2	-27.2	1	41.3	57.6	-16.3	1
FL-18	Brian Mast	(R)	45.5	53.9	-8.4	1	44.1	53.3	-9.2	1	47.7	51.4	-3.7	1
FL-19	Byron Donalds	(R)	39.6	59.7	-20.1	1	37.5	59.6	-22.1	1	38.7	60.5	-21.8	1
FL-20	[VACANT]	(D)	77.3	22.1	55.2	1	80.2	18.1	62.1	1	82.5	17.1	65.4	1
FL-21	Lois Frankel	(D)	58.2	41.2	17.0	1	58.6	39.1	19.5	1	60.4	38.9	21.5	1
FL-22	Ted Deutch	(D)	57.2	42.3	14.9	1	56.8	41.0	15.8	1	56.3	43.0	13.3	1
FL-23	Debbie Wasserman	(D)	58.3	41.2	17.1	1	61.9	35.8	26.1	1	61.4	38.0	23.4	1
FL-24	Frederica Wilson	(D)	75.4	24.0	51.4	1	82.9	15.4	67.5	1	85.7	13.9	71.8	1
FL-25	Mario Diaz-Balar	(R)	38.2	61.2	-23.0	1	47.9	49.7	-1.8	1	44.9	54.5	-9.6	1
FL-26	Carlos Giménez	(R)	46.9	52.5	-5.6	1	56.8	40.5	16.3	1	55.4	43.9	11.5	1
FL-27	Maria Elvira Sal	(R)	51.3	48.1	3.2	1	58.5	38.9	19.6	1	53.0	46.3	6.7	1
FL	Florida		47.9%	51.2%		2	47.8%	49.0%		2	50.0%	49.1%		2
FL	Florida				12	17			13	16			15	14
GA-01	Buddy Carter	(R)	43.1	55.5	-12.4	1	40.9	56.4	-15.5	1	43.0	55.9	-12.9	1
GA-02	Sanford Bishop	(D)	55.7	43.4	12.3	1	55.0	43.3	11.7	1	58.6	40.8	17.8	1
GA-03	Drew Ferguson	(R)	36.8	62.0	-25.2	1	32.8	64.3	-31.5	1	33.0	65.9	-32.9	1
GA-04	Hank Johnson	(D)	78.8	20.2	58.6	1	75.3	22.2	53.1	1	73.6	25.6	48.0	1
GA-05	Nikema Williams	(D)	86.2	12.7	73.5	1	85.0	11.9	73.1	1	83.1	15.8	67.3	1
GA-06	Lucy McBath	(D)	54.8	43.7	11.1	1	46.8	48.3	-1.5	1	37.5	60.8	-23.3	1
GA-07	Carolyn Bourdeau	(D)	52.4	46.1	6.3	1	44.8	51.1	-6.3	1	38.3	60.2	-21.9	1
GA-08	Austin Scott	(R)	37.0	62.0	-25.0	1	34.4	63.3	-28.9	1	37.5	61.6	-24.1	1
GA-09	Andrew Clyde	(R)	22.4	76.4	-54.0	1	19.3	77.8	-58.5	1	20.5	78.1	-57.6	1
GA-10	Jody Hice	(R)	39.2	59.6	-20.4	1	35.8	61.3	-25.5	1	36.3	62.5	-26.2	1
GA-11	Barry Loudermilk	(R)	41.5	56.9	-15.4	1	35.3	60.3	-25.0	1	31.5	66.9	-35.4	1
GA-12	Rick Allen	(R)	43.0	55.8	-12.8	1	40.7	56.9	-16.2	1	43.6	55.4	-11.8	1
GA-13	David Scott	(D)	75.6	23.4	52.2	1	71.0	26.6	44.4	1	69.2	30.0	39.2	1
GA-14	Marjorie Greene	(R)	25.3	73.4	-48.1	1	22.1	75.0	-52.9	1	25.3	73.2	-47.9	1
GA	Georgia		49.5%	49.2%		2	45.6%	50.8%		2	45.5%	53.3%		2
GA	Georgia				8	8			4	12			4	12
HI-01	Ed Case	(D)	63.8	34.5	29.3	1	63.1	30.5	32.6	1	69.7	29.0	40.7	1
HI-02	Kai Kahele	(D)	63.6	34.1	29.5	1	61.4	29.6	31.8	1	71.4	26.7	44.7	1
HI	Hawaii		63.7%	34.3%		2	62.2%	30.0%		2	70.5%	27.8%		2
HI	Hawaii				4	0			4	0			4	0
IA-01	Ashley Hinson	(R)	47.4	50.8	-3.4	1	45.2	48.7	-3.5	1	56.2	42.5	13.7	1
IA-02	Mariannette Mill	(R)	47.1	51.1	-4.0	1	45.0	49.1	-4.1	1	55.8	42.7	13.1	1
IA-03	Cindy Axne	(D)	49.0	49.2	-0.2	1	45.0	48.5	-3.5	1	51.4	47.2	4.2	1
IA-04	Randy Feenstra	(R)	35.7	62.7	-27.0	1	33.5	60.9	-27.4	1	45.3	53.4	-8.1	1
IA	Iowa		44.9%	53.1%		2	41.7%	51.1%		2	52.0%	46.2%		2
IA	Iowa				0	6			0	6			5	1
ID-01	Russ Fulcher	(R)	30.1	67.1	-37.0	1	25.4	63.7	-38.3	1	32.2	64.9	-32.7	1

ID-02	Mike Simpson	(R)	36.6	60.1	-23.5	1	29.8	54.5	-24.7	1	33.1	64.1	-31.0	1	
ID	Idaho		33.1%	63.8%		2	27.5%	59.3%		2	32.6%	64.5%		2	
ID	Idaho				0	4				0	4			0	4
IL-01	Bobby Rush	(D)	73.9	24.7	49.2	1	75.4	21.4	54.0	1	78.9	20.2	58.7	1	
IL-02	Robin Kelly	(D)	77.5	21.2	56.3	1	78.0	19.1	58.9	1	80.7	18.5	62.2	1	
IL-03	Marie Newman	(D)	55.5	42.9	12.6	1	55.2	39.9	15.3	1	55.9	42.6	13.3	1	
IL-04	Chuy Garcia	(D)	80.7	17.3	63.4	1	82.1	13.2	68.9	1	80.9	17.1	63.8	1	
IL-05	Mike Quigley	(D)	72.1	26.0	46.1	1	70.5	23.9	46.6	1	66.0	31.8	34.2	1	
IL-06	Sean Casten	(D)	55.3	42.6	12.7	1	50.2	43.2	7.0	1	45.1	53.3	-8.2	1	
IL-07	Danny Davis	(D)	86.3	12.1	74.2	1	87.4	9.2	78.2	1	87.2	11.8	75.4	1	
IL-08	Raja Krishnamoore	(D)	59.2	39.0	20.2	1	58.1	36.4	21.7	1	57.4	40.9	16.5	1	
IL-09	Jan Schakowsky	(D)	71.0	27.4	43.6	1	70.1	24.9	45.2	1	65.0	33.3	31.7	1	
IL-10	Brad Schneider	(D)	64.3	34.0	30.3	1	62.0	32.6	29.4	1	57.5	41.1	16.4	1	
IL-11	Bill Foster	(D)	61.9	36.2	25.7	1	58.9	35.4	23.5	1	57.8	40.6	17.2	1	
IL-12	Mike Bost	(R)	41.9	56.1	-14.2	1	40.2	55.0	-14.8	1	49.7	48.1	1.6	1	
IL-13	Rodney Davis	(R)	47.0	50.5	-3.5	1	44.2	49.7	-5.5	1	48.6	48.9	-0.3	1	
IL-14	Lauren Underwood	(D)	50.2	47.8	2.4	1	44.8	48.7	-3.9	1	44.2	54.2	-10.0	1	
IL-15	Mary Miller	(R)	25.9	72.2	-46.3	1	24.5	70.7	-46.2	1	34.1	63.9	-29.8	1	
IL-16	Adam Kinzinger	(R)	40.9	56.9	-16.0	1	38.3	55.5	-17.2	1	45.2	52.9	-7.7	1	
IL-17	Cheri Bustos	(D)	48.1	49.7	-1.6	1	46.7	47.4	-0.7	1	57.6	40.6	17.0	1	
IL-18	Darin LaHood	(R)	36.8	61.0	-24.2	1	33.3	60.6	-27.3	1	37.4	60.7	-23.3	1	
IL	Illinois		57.5%	40.6%		2	55.8%	38.8%		2	57.6%	40.7%		2	
IL	Illinois				14	6				13	7			14	6
IN-01	Frank Mrvan	(D)	53.6	44.8	8.8	1	54.1	41.5	12.6	1	61.2	37.4	23.8	1	
IN-02	Jackie Walorski	(R)	38.9	59.4	-20.5	1	36.1	59.3	-23.2	1	42.1	56.1	-14.0	1	
IN-03	Jim Banks	(R)	34.0	63.9	-29.9	1	30.1	65.1	-35.0	1	35.7	62.5	-26.8	1	
IN-04	Jim Baird	(R)	34.0	63.8	-29.8	1	30.2	64.3	-34.1	1	36.9	60.9	-24.0	1	
IN-05	Victoria Spartz	(R)	47.9	50.1	-2.2	1	41.3	53.1	-11.8	1	40.7	57.5	-16.8	1	
IN-06	Greg Pence	(R)	29.1	68.8	-39.7	1	27.4	67.7	-40.3	1	37.3	60.4	-23.1	1	
IN-07	André Carson	(D)	62.9	35.3	27.6	1	59.0	36.2	22.8	1	62.9	35.3	27.6	1	
IN-08	Larry Bucshon	(R)	33.1	65.1	-32.0	1	30.9	64.6	-33.7	1	39.6	58.4	-18.8	1	
IN-09	Trey Hollingsworth	(R)	37.2	60.8	-23.6	1	34.2	61.1	-26.9	1	40.7	57.2	-16.5	1	
IN	Indiana		41.0%	57.0%		2	37.8%	56.9%		2	43.9%	54.1%		2	
IN	Indiana				2	9				2	9			2	9
KS-01	Tracey Mann	(R)	28.1	69.7	-41.6	1	24.3	69.3	-45.0	1	27.6	70.1	-42.5	1	
KS-02	Jake LaTurner	(R)	41.3	56.3	-15.0	1	37.4	55.8	-18.4	1	42.2	55.4	-13.2	1	
KS-03	Sharice Davids	(D)	54.3	43.7	10.6	1	47.2	46.0	1.2	1	44.3	53.8	-9.5	1	
KS-04	Ron Estes	(R)	38.0	59.7	-21.7	1	33.0	60.2	-27.2	1	36.1	61.6	-25.5	1	
KS	Kansas		41.6%	56.2%		2	36.1%	56.7%		2	38.0%	59.7%		2	
KS	Kansas				1	5				1	5			0	6
KY-01	James Comer	(R)	25.5	73.1	-47.6	1	23.9	72.4	-48.5	1	32.1	66.4	-34.3	1	
KY-02	Brett Guthrie	(R)	30.6	67.6	-37.0	1	27.6	67.5	-39.9	1	35.1	63.3	-28.2	1	
KY-03	John Yarmuth	(D)	60.0	38.1	21.9	1	54.9	39.9	15.0	1	55.7	42.8	12.9	1	
KY-04	Thomas Massie	(R)	33.4	64.8	-31.4	1	29.3	65.2	-35.9	1	34.8	63.4	-28.6	1	
KY-05	Hal Rogers	(R)	18.6	80.2	-61.6	1	17.5	79.6	-62.1	1	23.2	75.0	-51.8	1	
KY-06	Andy Barr	(R)	44.5	53.6	-9.1	1	39.4	54.7	-15.3	1	42.2	55.8	-13.6	1	
KY	Kentucky		36.2%	62.1%		2	32.7%	62.5%		2	37.8%	60.5%		2	
KY	Kentucky				1	7				1	7			1	7
LA-01	Steve Scalise	(R)	30.1	68.0	-37.9	1	26.7	68.7	-42.0	1	26.9	70.9	-44.0	1	
LA-02	Troy Carter	(D)	75.3	23.0	52.3	1	74.6	22.2	52.4	1	75.8	22.8	53.0	1	
LA-03	Clay Higgins	(R)	30.2	68.1	-37.9	1	29.2	67.3	-38.1	1	32.3	66.1	-33.8	1	
LA-04	Mike Johnson	(R)	37.0	61.5	-24.5	1	36.6	60.6	-24.0	1	39.7	59.0	-19.3	1	
LA-05	Julia Letlow	(R)	34.1	64.5	-30.4	1	34.1	63.5	-29.4	1	37.7	61.0	-23.3	1	
LA-06	Garret Graves	(R)	34.4	63.8	-29.4	1	31.0	64.8	-33.8	1	32.0	66.1	-34.1	1	
LA	Louisiana		39.9%	58.5%		2	38.4%	58.1%		2	40.6%	57.8%		2	
LA	Louisiana				1	7				1	7			1	7
MA-01	Richard Neal	(D)	61.1	36.9	24.2	1	57.2	36.5	20.7	1	64.0	34.3	29.7	1	
MA-02	Jim McGovern	(D)	61.8	36.0	25.8	1	56.2	36.8	19.4	1	58.7	39.2	19.5	1	
MA-03	Lori Trahan	(D)	63.4	34.6	28.8	1	58.2	35.4	22.8	1	56.9	41.4	15.5	1	
MA-04	Jake Auchincloss	(D)	64.5	33.7	30.8	1	59.2	35.0	24.2	1	57.2	41.3	15.9	1	
MA-05	Katherine Clark	(D)	74.5	23.9	50.6	1	69.3	25.7	43.6	1	65.2	33.1	32.1	1	
MA-06	Seth Moulton	(D)	62.6	35.6	27.0	1	56.1	38.2	17.9	1	54.7	43.9	10.8	1	
MA-07	Ayanna Pressley	(D)	85.3	13.3	72.0	1	84.1	11.9	72.2	1	82.5	15.6	66.9	1	
MA-08	Stephen Lynch	(D)	66.2	32.2	34.0	1	60.4	34.4	26.0	1	57.8	40.8	17.0	1	
MA-09	Bill Keating	(D)	57.9	40.3	17.6	1	52.5	41.8	10.7	1	55.5	43.1	12.4	1	
MA	Massachusetts		65.6%	32.1%		2	60.0%	32.8%		2	60.7%	37.5%		2	
MA	Massachusetts				11	0				11	0			11	0
MD-01	Andy Harris	(R)	39.1	58.8	-19.7	1	33.4	62.0	-28.6	1	37.7	60.4	-22.7	1	
MD-02	Dutch Ruppersberger	(D)	65.8	32.4	33.4	1	60.1	35.7	24.4	1	63.1	35.0	28.1	1	
MD-03	John Sarbanes	(D)	68.7	29.4	39.3	1	62.8	32.3	30.5	1	60.7	37.1	23.6	1	
MD-04	Anthony Brown	(D)	79.1	19.2	59.9	1	77.2	19.7	57.5	1	78.1	20.8	57.3	1	
MD-05	Steny Hoyer	(D)	68.6	29.7	38.9	1	64.1	32.1	32.0	1	66.1	32.4	33.7	1	
MD-06	David Trone	(D)	60.6	37.5	23.1	1	55.3	40.2	15.1	1	55.2	42.8	12.4	1	
MD-07	Kweisi Mfume	(D)	78.4	20.0	58.4	1	75.8	20.2	55.6	1	76.2	22.3	53.9	1	
MD-08	Jamie Raskin	(D)	69.3	28.9	40.4	1	65.0	30.6	34.4	1	62.0	36.0	26.0	1	
MD	Maryland		65.4%	32.2%		2	60.3%	33.9%		2	62.0%	35.9%		2	
MD	Maryland				9	1				9	1			9	1
ME-01	Chellie Pingree	(D)	60.1	37.0	23.1	1	54.1	39.3	14.8	1	59.6	38.2	21.4	1	
ME-02	Jared Golden	(D)	44.8	52.3	-7.5	1	41.1	51.4	-10.3	1	53.0	44.4	8.6	1	
ME	Maine		53.1%	44.0%		2	47.8%	44.9%		2	56.3%	41.0%		2	
ME	Maine				3	1				3	1			4	0
MI-01	Jack Bergman	(R)	40.6	57.9	-17.3	1	36.6	57.9	-21.3	1	45.3	53.6	-8.3	1	
MI-02	Bill Huizenga	(R)	43.2	55.0	-11.8	1	38.2	55.8	-17.6	1	43.1	56.0	-12.9	1	
MI-03	Peter Meijer	(R)	47.4	50.6	-3.2	1	42.2	51.6	-9.4	1	45.8	53.1	-7.3	1	
MI-04	John Moolenaar	(R)	37.1	61.2	-24.1	1	34.7	59.5	-24.8	1	45.5	53.5	-8.0	1	
MI-05	Dan Kildee	(D)	51.4	47.1	4.3	1	49.7	45.5	4.2	1	60.7	38.3	22.4	1	
MI-06	Fred Upton	(R)	46.8	51.3	-4.5	1	42.9	51.3	-8.4	1	48.8	50.2	-1.4	1	
MI-07	Tim Walberg	(R)	41.4	56.9	-15.5	1	38.7	55.7	-17.0	1	47.9	51.0	-3.1	1	
MI-08	Elissa Slotkin	(D)	48.8	49.6	-0.8	1	43.9	50.6	-6.7	1	48.0	51.1	-3.1	1	
MI-09	Andy Levin</														

MN-02	Angie Craig	(D)	52.4	45.5	6.9	1	45.3	46.5	-1.2	1	49.1	49.0	0.1	1
MN-03	Dean Phillips	(D)	58.7	39.4	19.3	1	50.8	41.4	9.4	1	49.6	48.8	0.8	1
MN-04	Betty McCollum	(D)	67.6	30.5	37.1	1	61.5	30.6	30.9	1	62.5	35.5	27.0	1
MN-05	Ilhan Omar	(D)	80.3	17.7	62.6	1	73.7	18.5	55.2	1	73.5	24.0	49.5	1
MN-06	Tom Emmer	(R)	38.8	59.0	-20.2	1	33.2	58.9	-25.7	1	41.5	56.5	-15.0	1
MN-07	Michelle Fischbach	(R)	34.4	63.8	-29.4	1	31.0	61.8	-30.8	1	44.1	53.9	-9.8	1
MN-08	Pete Stauber	(R)	41.7	56.3	-14.6	1	38.6	54.2	-15.6	1	51.7	46.2	5.5	1
MN	Minnesota		52.4%	45.3%		2	46.4%	44.9%		2	52.7%	45.0%		2
MN	Minnesota					6				5				8
MO-01	Cori Bush	(D)	80.3	18.1	62.2	1	77.0	18.8	58.2	1	79.9	18.9	61.0	1
MO-02	Ann Wagner	(R)	49.2	49.2	0.0	1	42.3	52.6	-10.3	1	41.4	57.1	-15.7	1
MO-03	Blaine Luetkemeyer	(R)	31.3	66.9	-35.6	1	28.1	67.1	-39.0	1	36.1	62.0	-25.9	1
MO-04	Vicky Hartzler	(R)	31.9	66.0	-34.1	1	29.3	65.3	-36.0	1	36.4	61.2	-24.8	1
MO-05	Emanuel Cleaver	(D)	58.4	39.6	18.8	1	54.1	40.6	13.5	1	58.9	39.4	19.5	1
MO-06	Sam Graves	(R)	35.0	63.3	-28.3	1	31.7	63.1	-31.4	1	37.9	60.0	-22.1	1
MO-07	Billy Long	(R)	28.1	70.0	-41.9	1	24.7	70.4	-45.7	1	30.3	67.6	-37.3	1
MO-08	Jason Smith	(R)	21.4	77.3	-55.9	1	21.0	75.4	-54.4	1	32.0	65.9	-33.9	1
MO	Missouri		41.4%	56.8%		2	38.1%	56.8%		2	44.4%	53.8%		2
MO	Missouri					2				2				2
MS-01	Trent Kelly	(R)	33.8	64.8	-31.0	1	32.4	65.4	-33.0	1	37.0	61.9	-24.9	1
MS-02	Bennie Thompson	(D)	63.7	35.2	28.5	1	63.6	35.1	28.5	1	66.4	33.0	33.4	1
MS-03	Michael Guest	(R)	38.6	60.1	-21.5	1	36.8	61.3	-24.5	1	39.1	60.0	-20.9	1
MS-04	Steven Palazzo	(R)	30.3	68.3	-38.0	1	28.2	69.4	-41.2	1	31.2	67.6	-36.4	1
MS	Mississippi		41.1%	57.6%		2	40.1%	57.9%		2	43.8%	55.3%		2
MS	Mississippi					1				1				5
MT-AL	Matt Rosendale	(R)	40.6	56.9	-16.3	1	35.9	56.5	-20.6	1	41.7	55.4	-13.7	1
MT	Montana		40.5%	56.9%		2	35.7%	56.2%		2	41.7%	55.4%		2
MT	Montana					0				3				3
NC-01	G.K. Butterfield	(D)	53.9	45.3	8.6	1	54.7	43.6	11.1	1	57.1	42.4	14.7	1
NC-02	Deborah Ross	(D)	64.3	34.0	30.3	1	60.3	35.9	24.4	1	57.0	41.7	15.3	1
NC-03	Greg Murphy	(R)	37.7	60.9	-23.2	1	36.5	61.0	-24.5	1	40.5	58.6	-18.1	1
NC-04	David Price	(D)	66.6	32.2	34.4	1	65.2	31.9	33.3	1	63.2	35.7	27.5	1
NC-05	Virginia Foxx	(R)	31.6	67.4	-35.8	1	30.3	67.2	-36.9	1	35.6	63.1	-27.5	1
NC-06	Kathy Manning	(D)	61.6	37.2	24.4	1	59.4	37.9	21.5	1	58.4	40.7	17.7	1
NC-07	David Rouzer	(R)	40.7	58.1	-17.4	1	38.7	58.6	-19.9	1	41.9	57.2	-15.3	1
NC-08	Richard Hudson	(R)	46.1	52.5	-6.4	1	44.1	53.2	-9.1	1	47.3	51.8	-4.5	1
NC-09	Dan Bishop	(R)	45.5	53.4	-7.9	1	43.3	53.7	-10.4	1	44.2	54.9	-10.7	1
NC-10	Patrick McHenry	(R)	31.2	67.7	-36.5	1	29.6	67.8	-38.2	1	34.1	64.9	-30.8	1
NC-11	Madison Cawthorn	(R)	43.3	55.4	-12.1	1	39.9	57.2	-17.3	1	43.5	55.2	-11.7	1
NC-12	Alma Adams	(D)	70.1	28.5	41.6	1	67.3	29.5	37.8	1	66.5	32.6	33.9	1
NC-13	Ted Budd	(R)	31.8	67.1	-35.3	1	30.6	67.0	-36.4	1	34.3	64.7	-30.4	1
NC	North Carolina		48.6%	49.9%		2	46.2%	49.8%		2	48.4%	50.4%		2
NC	North Carolina					5				10				10
ND-AL	Kelly Armstrong	(R)	31.9	65.5	-33.6	1	27.7	64.1	-36.4	1	38.9	58.7	-19.8	1
ND	North Dakota		31.8%	65.1%		2	27.2%	63.0%		2	38.7%	58.3%		2
ND	North Dakota					0				3				3
NE-01	Jeff Fortenberry	(R)	41.3	56.3	-15.0	1	36.2	57.5	-21.3	1	40.8	57.5	-16.7	1
NE-02	Don Bacon	(R)	52.3	45.7	6.6	1	46.0	48.2	-2.2	1	45.7	52.8	-7.1	1
NE-03	Adrian Smith	(R)	22.4	75.6	-53.2	1	20.0	74.9	-54.9	1	27.8	70.2	-42.4	1
NE	Nebraska		39.2%	58.2%		2	33.7%	58.7%		2	38.0%	59.8%		2
NE	Nebraska					1				5				5
NH-01	Chris Pappas	(D)	52.2	46.2	6.0	1	46.6	48.2	-1.6	1	50.2	48.6	1.6	1
NH-02	Annie Kuster	(D)	53.5	44.8	8.7	1	48.6	46.2	2.4	1	54.2	44.5	9.7	1
NH	New Hampshire		52.7%	45.4%		2	46.8%	46.5%		2	52.0%	46.4%		2
NH	New Hampshire					4				3				4
NJ-01	Donald Norcross	(D)	62.1	36.6	25.5	1	60.6	36.1	24.5	1	65.1	33.8	31.3	1
NJ-02	Jeff Van Drew	(R)	47.9	50.8	-2.9	1	46.0	50.6	-4.6	1	53.5	45.4	8.1	1
NJ-03	Andy Kim	(D)	49.2	49.4	-0.2	1	45.2	51.4	-6.2	1	51.8	47.2	4.6	1
NJ-04	Chris Smith	(R)	44.1	54.6	-10.5	1	41.0	55.8	-14.8	1	44.7	54.2	-9.5	1
NJ-05	Josh Gottheimer	(D)	51.9	46.7	5.2	1	47.7	48.8	-1.1	1	47.9	50.9	-3.0	1
NJ-06	Frank Pallone	(D)	57.2	41.5	15.7	1	56.2	40.6	15.6	1	61.4	37.4	24.0	1
NJ-07	Tom Malinowski	(D)	54.2	44.3	9.9	1	48.6	47.5	1.1	1	46.3	52.5	-6.2	1
NJ-08	Albio Sires	(D)	71.8	27.2	44.6	1	75.7	21.5	54.2	1	78.3	20.8	57.5	1
NJ-09	Bill Pascrell	(D)	62.2	36.8	25.4	1	64.3	33.1	31.2	1	68.4	30.8	37.6	1
NJ-10	Donald Payne	(D)	84.2	15.0	69.2	1	85.2	12.8	72.4	1	87.9	11.5	76.4	1
NJ-11	Mikie Sherrill	(D)	52.7	46.0	6.7	1	47.9	48.8	-0.9	1	46.6	52.4	-5.8	1
NJ-12	Bonnie Watson Coler	(D)	67.3	31.4	35.9	1	65.0	31.8	33.2	1	66.5	32.4	34.1	1
NJ	New Jersey		57.3%	41.4%		2	55.5%	41.4%		2	58.4%	40.6%		2
NJ	New Jersey					11				9				10
NM-01	Melanie Stansbury	(D)	60.2	37.4	22.8	1	51.6	35.1	16.5	1	55.3	39.6	15.7	1
NM-02	Yvette Herrell	(R)	43.1	54.9	-11.8	1	39.9	50.1	-10.2	1	44.9	51.7	-6.8	1
NM-03	Teresa Leger Fernandez	(D)	57.7	40.1	17.6	1	51.8	36.7	15.1	1	57.5	38.7	18.8	1
NM	New Mexico		54.3%	43.5%		2	48.3%	40.0%		2	53.0%	42.8%		2
NM	New Mexico					4				4				4
NV-01	Dina Titus	(D)	61.5	36.4	25.1	1	61.6	32.6	29.0	1	65.6	32.4	33.2	1
NV-02	Mark Amodei	(R)	43.6	53.6	-10.0	1	39.7	52.0	-12.3	1	44.8	52.9	-8.1	1
NV-03	Susie Lee	(D)	49.2	49.0	0.2	1	46.5	47.5	-1.0	1	49.5	48.7	0.8	1
NV-04	Steven Horsford	(D)	50.9	47.0	3.9	1	49.5	44.6	4.9	1	54.4	43.7	10.7	1
NV	Nevada		50.1%	47.7%		2	47.9%	45.5%		2	52.4%	45.7%		2
NV	Nevada					5				4				5
NY-01	Lee Zeldin	(R)	47.3	51.5	-4.2	1	42.2	54.5	-12.3	1	49.6	49.1	0.5	1
NY-02	Andrew Garbarino	(R)	47.4	51.4	-4.0	1	43.9	53.0	-9.1	1	51.6	47.2	4.4	1
NY-03	Tom Suozzi	(D)	54.7	44.3	10.4	1	51.6	45.5	6.1	1	50.8	48.2	2.6	1
NY-04	Kathleen Rice	(D)	55.6	43.4	12.2	1	53.4	43.8	9.6	1	56.3	42.8	13.5	1
NY-05	Gregory Meeks	(D)	83.3	16.2	67.1	1	85.7	12.7	73.0	1	90.6	9.1	81.5	1
NY-06	Grace Meng	(D)	61.8	37.4	24.4	1	65.1	32.1	33.0	1	67.8	31.0	36.8	1
NY-07	Nydia Velázquez	(D)	81.8	17.3	64.5	1	86.9	10.4	76.5	1	88.4	10.3	78.1	1
NY-08	Hakeem Jeffries	(D)	82.9	16.5	66.4	1	84.6	13.5	71.1	1	89.3	10.1	79.2	1
NY-09	Yvette Clarke	(D)	81.4	17.8	63.6	1	83.5	14.4	69.1	1	85.3	13.8	71.5	1
NY-10	Jerry Nadler	(D)	76.1	22.9	53.2									

NY-18	Sean Patrick Maloney (D)	51.8	46.8	5.0	1	47.1	49.0	-1.9	1	51.4	47.1	4.3	1
NY-19	Antonio Delgado (D)	49.8	48.3	1.5	1	44.0	50.8	-6.8	1	52.1	45.9	6.2	1
NY-20	Paul Tonko (D)	59.3	38.7	20.6	1	54.0	40.5	13.5	1	59.2	38.8	20.4	1
NY-21	Elise Stefanik (R)	43.8	54.2	-10.4	1	40.0	53.9	-13.9	1	52.2	46.1	6.1	1
NY-22	Claudia Tenney (R)	43.2	54.7	-11.5	1	39.3	54.8	-15.5	1	48.8	49.2	-0.4	1
NY-23	Tom Reed (R)	43.3	54.5	-11.2	1	39.7	54.5	-14.8	1	48.4	49.6	-1.2	1
NY-24	John Katko (R)	53.4	44.4	9.0	1	48.9	45.3	3.6	1	57.0	41.1	15.9	1
NY-25	Joe Morelle (D)	60.1	37.8	22.3	1	55.5	39.1	16.4	1	58.8	39.4	19.4	1
NY-26	Brian Higgins (D)	62.6	35.6	27.0	1	57.6	38.0	19.6	1	63.9	34.3	29.6	1
NY-27	Chris Jacobs (R)	41.1	56.8	-15.7	1	35.2	59.7	-24.5	1	42.9	55.3	-12.4	1
NY	New York	60.9%	37.8%		2	59.0%	36.5%		2	63.3%	35.2%		2
NY	New York				22				7				26
OH-01	Steve Chabot (R)	47.7	50.9	-3.2	1	44.6	51.2	-6.6	1	46.3	52.4	-6.1	1
OH-02	Brad Wenstrup (R)	42.9	55.6	-12.7	1	39.7	55.8	-16.1	1	43.7	54.7	-11.0	1
OH-03	Joyce Beatty (D)	70.0	28.4	41.6	1	67.0	28.6	38.4	1	69.7	28.9	40.8	1
OH-04	Jim Jordan (R)	31.2	67.1	-35.9	1	30.7	64.3	-33.6	1	42.0	56.0	-14.0	1
OH-05	Bob Latta (R)	36.7	61.6	-24.9	1	34.6	59.7	-25.1	1	44.1	53.9	-9.8	1
OH-06	Bill Johnson (R)	26.5	72.2	-45.7	1	26.7	69.3	-42.6	1	42.7	55.2	-12.5	1
OH-07	Bob Gibbs (R)	33.2	65.3	-32.1	1	32.8	62.5	-29.7	1	44.2	53.7	-9.5	1
OH-08	Warren Davidson (R)	32.5	66.0	-33.5	1	30.6	65.1	-34.5	1	36.4	61.9	-25.5	1
OH-09	Marcy Kaptur (D)	58.8	39.7	19.1	1	58.7	36.5	22.2	1	67.6	30.9	36.7	1
OH-10	Mike Turner (R)	47.0	51.4	-4.4	1	44.0	51.3	-7.3	1	48.2	50.1	-1.9	1
OH-11	[VACANT] (D)	79.8	19.2	60.6	1	80.5	17.0	63.5	1	82.7	16.5	66.2	1
OH-12	Troy Balderson (R)	46.3	52.2	-5.9	1	41.9	53.2	-11.3	1	43.9	54.4	-10.5	1
OH-13	Tim Ryan (D)	51.0	47.6	3.4	1	51.1	44.6	6.5	1	62.9	35.4	27.5	1
OH-14	David Joyce (R)	44.9	53.9	-9.0	1	42.1	53.6	-11.5	1	47.6	50.9	-3.3	1
OH-15	[VACANT] (R)	42.2	56.3	-14.1	1	39.9	55.3	-15.4	1	46.3	51.9	-5.6	1
OH-16	Anthony Gonzalez (R)	42.2	56.5	-14.3	1	39.5	56.2	-16.7	1	45.2	53.4	-8.2	1
OH	Ohio	45.2%	53.3%		2	43.6%	51.7%		2	50.7%	47.7%		2
OH	Ohio				4				14				6
OK-01	Kevin Hern (R)	37.3	60.1	-22.8	1	32.7	61.4	-28.7	1	34.2	65.8	-31.6	1
OK-02	Markwayne Mullin (R)	22.2	76.1	-53.9	1	22.8	72.9	-50.1	1	32.2	67.8	-35.6	1
OK-03	Frank Lucas (R)	23.2	74.6	-51.4	1	20.9	73.6	-52.7	1	26.1	73.9	-47.8	1
OK-04	Tom Cole (R)	32.0	65.6	-33.6	1	28.3	65.7	-37.4	1	32.9	67.1	-34.2	1
OK-05	Stephanie Bice (R)	46.0	51.4	-5.4	1	39.8	53.2	-13.4	1	40.8	59.2	-18.4	1
OK	Oklahoma	32.3%	65.4%		2	28.9%	65.3%		2	33.2%	66.8%		2
OK	Oklahoma				0				7				0
OR-01	Suzanne Bonamici (D)	63.3	34.1	29.2	1	57.3	34.5	22.8	1	57.3	40.0	17.3	1
OR-02	Cliff Bentz (R)	42.1	55.6	-13.5	1	36.4	56.5	-20.1	1	40.5	56.8	-16.3	1
OR-03	Earl Blumenauer (D)	74.3	23.5	50.8	1	70.7	22.5	48.2	1	72.0	24.7	47.3	1
OR-04	Peter DeFazio (D)	50.7	46.7	4.0	1	46.1	46.0	0.1	1	51.7	45.0	6.7	1
OR-05	Kurt Schrader (D)	53.6	43.9	9.7	1	48.3	44.1	4.2	1	50.5	47.1	3.4	1
OR	Oregon	56.5%	40.4%		2	50.1%	39.1%		2	54.2%	42.1%		2
OR	Oregon				6				1				6
PA-01	Brian Fitzpatrick (R)	52.4	46.6	5.8	1	49.1	47.1	2.0	1	50.2	48.6	1.6	1
PA-02	Brendan Boyle (D)	70.1	29.1	41.0	1	72.9	24.9	48.0	1	77.4	21.8	55.6	1
PA-03	Dwight Evans (D)	91.3	8.1	83.2	1	90.9	7.0	83.9	1	91.7	7.6	84.1	1
PA-04	Madeleine Dean (D)	61.5	37.4	24.1	1	57.8	38.5	19.3	1	56.1	42.8	13.3	1
PA-05	Mary Gay Scanlon (D)	65.1	34.0	31.1	1	62.6	34.4	28.2	1	63.4	35.7	27.7	1
PA-06	Chrissy Houlahan (D)	56.9	41.9	15.0	1	52.6	43.3	9.3	1	51.0	47.8	3.2	1
PA-07	Susan Wild (D)	51.8	47.0	4.8	1	48.7	47.6	1.1	1	52.9	45.9	7.0	1
PA-08	Matt Cartwright (D)	47.3	51.7	-4.4	1	43.7	53.3	-9.6	1	55.3	43.4	11.9	1
PA-09	Dan Meuser (R)	34.1	64.5	-30.4	1	31.0	65.0	-34.0	1	41.2	57.2	-16.0	1
PA-10	Scott Perry (R)	47.8	50.7	-2.9	1	43.4	52.3	-8.9	1	46.0	52.6	-6.6	1
PA-11	Lloyd Smucker (R)	38.3	60.2	-21.9	1	34.7	60.5	-25.8	1	38.0	60.5	-22.5	1
PA-12	Fred Keller (R)	31.2	67.3	-36.1	1	29.7	66.1	-36.4	1	36.8	61.5	-24.7	1
PA-13	John Joyce (R)	27.2	71.6	-44.4	1	25.5	71.2	-45.7	1	32.1	66.6	-34.5	1
PA-14	Guy Reschenthaler (R)	35.7	63.2	-27.5	1	33.9	62.9	-29.0	1	40.6	58.3	-17.7	1
PA-15	Glenn Thompson (R)	27.5	71.2	-43.7	1	26.5	69.8	-43.3	1	35.7	62.6	-26.9	1
PA-16	Mike Kelly (R)	40.0	58.7	-18.7	1	37.9	57.9	-20.0	1	46.9	51.7	-4.8	1
PA-17	Conor Lamb (D)	50.7	48.0	2.7	1	46.8	49.4	-2.6	1	47.2	51.7	-4.5	1
PA-18	Mike Doyle (D)	64.5	34.4	30.1	1	62.1	34.6	27.5	1	63.5	35.2	28.3	1
PA	Pennsylvania	50.0%	48.8%		2	47.5%	48.2%		2	52.0%	46.6%		2
PA	Pennsylvania				11				9				11
RI-01	David Cicilline (D)	63.9	34.6	29.3	1	60.5	34.9	25.6	1	66.2	32.2	34.0	1
RI-02	Jim Langevin (D)	56.0	42.5	13.5	1	51.1	44.0	7.1	1	59.8	38.3	21.5	1
RI	Rhode Island	59.4%	38.6%		2	54.4%	38.9%		2	62.7%	35.2%		2
RI	Rhode Island				4				0				4
SC-01	Nancy Mace (R)	46.1	52.1	-6.0	1	40.4	53.5	-13.1	1	40.2	58.3	-18.1	1
SC-02	Joe Wilson (R)	43.6	54.9	-11.3	1	38.6	56.3	-17.7	1	39.4	59.1	-19.7	1
SC-03	Jeff Duncan (R)	30.5	68.1	-37.6	1	29.0	67.0	-38.0	1	33.9	64.5	-30.6	1
SC-04	William Timmons (R)	38.9	59.3	-20.4	1	34.5	60.2	-25.7	1	36.2	62.2	-26.0	1
SC-05	Ralph Norman (R)	41.0	57.6	-16.6	1	38.8	57.3	-18.5	1	43.6	55.1	-11.5	1
SC-06	Jim Clyburn (D)	67.0	31.8	35.2	1	66.8	30.3	36.5	1	70.9	28.1	42.8	1
SC-07	Tom Rice (R)	40.2	58.8	-18.6	1	39.1	58.0	-18.9	1	44.4	54.5	-10.1	1
SC	South Carolina	43.4%	55.1%		2	40.7%	54.9%		2	44.1%	54.6%		2
SC	South Carolina				1				8				1
SD-AL	Dusty Johnson (R)	35.6	61.8	-26.2	1	31.7	61.5	-29.8	1	39.9	57.9	-18.0	1
SD	South Dakota	35.6%	61.8%		2	31.7%	61.5%		2	39.9%	57.9%		2
SD	South Dakota				0				3				0
TN-01	Diana Harshbarger (R)	22.1	76.2	-54.1	1	19.7	76.7	-57.0	1	25.7	72.7	-47.0	1
TN-02	Tim Burchett (R)	34.5	63.6	-29.1	1	29.7	65.1	-35.4	1	30.9	67.3	-36.4	1
TN-03	Chuck Fleischmann (R)	32.9	65.3	-32.4	1	30.2	65.4	-35.2	1	35.1	63.3	-28.2	1
TN-04	Scott DesJarlais (R)	30.7	67.5	-36.8	1	27.4	68.6	-41.2	1	33.1	65.3	-32.2	1
TN-05	Jim Cooper (D)	60.3	36.7	23.6	1	56.5	38.2	18.3	1	55.9	42.5	13.4	1
TN-06	John Rose (R)	25.6	72.7	-47.1	1	23.7	72.6	-48.9	1	29.5	69.1	-39.6	1
TN-07	Mark Green (R)	31.3	66.9	-35.6	1	28.2	67.5	-39.3	1	32.9	65.7	-32.8	1
TN-08	David Kustoff (R)	33.2	65.4	-32.2	1	30.7	66.3	-35.6	1	32.9	66.1	-33.2	1
TN-09	Steve Cohen (D)	78.5	19.9	58.6	1	77.5	19.8	57.7	1	78.4	20.9	57.5	1
TN	Tennessee	37.5%	60.7%		2	34.7%	60.7%		2	39.1%	59.5%		2
TN	Tennessee				2				9				2
TX-01	Louie Gohmert (R)	27.2	71.6	-44.4	1	25.3	72.2	-46.9	1	27.5	71.6	-44.1	1
TX-02	Dan Crenshaw (R)	48.6	49.9	-1.3	1	43.1	52.4	-9.3	1	35.6	62.9	-27.3	1
TX-03	Van Taylor (R)	48.7	49.8</										

TX-09	Al Green	(D)	75.7	23.3	52.4	1	79.3	18.0	61.3	1	78.0	21.1	56.9	1	
TX-10	Michael McCaul	(R)	48.4	50.0	-1.6	1	43.2	52.3	-9.1	1	38.8	59.1	-20.3	1	
TX-11	August Pfluger	(R)	19.7	79.1	-59.4	1	19.1	77.8	-58.7	1	19.6	79.2	-59.6	1	
TX-12	Kay Granger	(R)	37.9	60.5	-22.6	1	32.7	62.9	-30.2	1	31.7	66.8	-35.1	1	
TX-13	Ronny Jackson	(R)	19.4	79.2	-59.8	1	16.9	79.9	-63.0	1	18.5	80.2	-61.7	1	
TX-14	Randy Weber	(R)	39.6	59.0	-19.4	1	38.4	58.2	-19.8	1	39.5	59.3	-19.8	1	
TX-15	Vicente González	(D)	50.4	48.5	1.9	1	56.7	40.0	16.7	1	57.4	41.5	15.9	1	
TX-16	Veronica Escobar	(D)	66.4	32.0	34.4	1	67.9	27.2	40.7	1	64.2	34.5	29.7	1	
TX-17	Pete Sessions	(R)	43.6	54.6	-11.0	1	38.8	56.3	-17.5	1	37.7	60.4	-22.7	1	
TX-18	Sheila Jackson Lee	(D)	75.7	23.0	52.7	1	76.5	20.0	56.5	1	76.1	22.8	53.3	1	
TX-19	Jodey Arrington	(R)	26.3	72.2	-45.9	1	23.5	72.5	-49.0	1	25.0	73.6	-48.6	1	
TX-20	Joaquin Castro	(D)	63.7	34.7	29.0	1	61.0	34.3	26.7	1	58.9	39.7	19.2	1	
TX-21	Chip Roy	(R)	47.9	50.6	-2.7	1	42.5	52.5	-10.0	1	37.9	59.8	-21.9	1	
TX-22	Troy Nehls	(R)	48.9	49.8	-0.9	1	44.2	52.1	-7.9	1	36.7	62.1	-25.4	1	
TX-23	Tony Gonzales	(R)	48.5	50.3	-1.8	1	49.8	46.4	3.4	1	48.1	50.7	-2.6	1	
TX-24	Beth Van Dyne	(R)	51.9	46.5	5.4	1	44.5	50.7	-6.2	1	38.0	60.4	-22.4	1	
TX-25	Roger Williams	(R)	44.4	54.0	-9.6	1	40.2	55.1	-14.9	1	37.8	59.9	-22.1	1	
TX-26	Michael Burgess	(R)	42.1	56.3	-14.2	1	34.4	60.9	-26.5	1	30.7	67.6	-36.9	1	
TX-27	Michael Cloud	(R)	37.5	61.2	-23.7	1	36.5	60.1	-23.6	1	38.2	60.5	-22.3	1	
TX-28	Henry Cuellar	(D)	51.6	47.2	4.4	1	58.3	38.5	19.8	1	60.3	38.7	21.6	1	
TX-29	Sylvia Garcia	(D)	65.9	32.9	33.0	1	71.1	25.4	45.7	1	65.9	33.0	32.9	1	
TX-30	Eddie Bernice Johnson	(D)	79.8	18.9	60.9	1	79.1	18.3	60.8	1	79.6	19.6	60.0	1	
TX-31	John Carter	(R)	47.6	50.4	-2.8	1	40.8	53.5	-12.7	1	38.3	59.6	-21.3	1	
TX-32	Colin Allred	(D)	54.4	44.0	10.4	1	48.5	46.6	1.9	1	41.5	57.0	-15.5	1	
TX-33	Marc Veasey	(D)	73.0	25.6	47.4	1	72.9	23.7	49.2	1	72.0	27.1	44.9	1	
TX-34	Filemon Vela	(D)	51.5	47.5	4.0	1	59.2	37.7	21.5	1	60.8	38.3	22.5	1	
TX-35	Lloyd Doggett	(D)	67.7	30.5	37.2	1	64.1	30.5	33.6	1	63.0	34.6	28.4	1	
TX-36	Brian Babin	(R)	26.9	71.9	-45.0	1	25.2	72.0	-46.8	1	25.7	73.2	-47.5	1	
TX	Texas		46.5%	52.1%		2	43.2%	52.2%		2	41.4%	57.2%		2	
TX	Texas					14	24			14	24			11	27
UT-01	Blake Moore	(R)	31.6	64.2	-32.6	1	22.4	49.7	-27.3	1	20.4	77.4	-57.0	1	
UT-02	Chris Stewart	(R)	40.2	56.1	-15.9	1	32.0	46.0	-14.0	1	29.2	68.0	-38.8	1	
UT-03	John Curtis	(R)	35.2	60.3	-25.1	1	23.3	47.2	-23.9	1	19.5	78.3	-58.8	1	
UT-04	Burgess Owens	(R)	43.3	52.4	-9.1	1	32.4	39.1	-6.7	1	30.2	67.2	-37.0	1	
UT	Utah		37.6%	58.1%		2	27.5%	45.5%		2	24.7%	72.8%		2	
UT	Utah					0	6			0	6			0	6
VA-01	Rob Wittman	(R)	47.0	51.4	-4.4	1	41.2	53.6	-12.4	1	43.4	55.3	-11.9	1	
VA-02	Elaine Luria	(D)	51.4	46.7	4.7	1	45.4	48.8	-3.4	1	48.2	50.5	-2.3	1	
VA-03	Bobby Scott	(D)	67.2	31.2	36.0	1	63.6	31.9	31.7	1	67.6	31.3	36.3	1	
VA-04	Donald McEachin	(D)	61.8	36.8	25.0	1	58.7	37.1	21.6	1	60.3	38.5	21.8	1	
VA-05	Bob Good	(R)	45.1	53.6	-8.5	1	42.3	53.4	-11.1	1	45.9	52.5	-6.6	1	
VA-06	Ben Cline	(R)	38.6	59.8	-21.2	1	34.9	59.7	-24.8	1	39.5	58.8	-19.3	1	
VA-07	Abigail Spanberger	(D)	49.8	48.7	1.1	1	44.0	50.5	-6.5	1	44.1	54.6	-10.5	1	
VA-08	Don Beyer	(D)	77.6	21.1	56.5	1	73.5	20.9	52.6	1	67.8	31.0	36.8	1	
VA-09	Morgan Griffith	(R)	28.4	70.4	-42.0	1	27.3	68.8	-41.5	1	34.9	63.1	-28.2	1	
VA-10	Jennifer Wexton	(D)	58.9	39.6	19.3	1	52.2	42.2	10.0	1	48.8	49.9	-1.1	1	
VA-11	Gerry Connolly	(D)	70.3	28.3	42.0	1	66.9	27.5	39.4	1	62.5	36.3	26.2	1	
VA	Virginia		54.1%	44.0%		2	49.7%	44.4%		2	51.2%	47.3%		2	
VA	Virginia					9	4			7	6			6	7
VT-AL	Peter Welch	(D)	66.4	30.8	35.6	1	56.7	30.3	26.4	1	67.0	31.2	35.8	1	
VT	Vermont		66.1%	30.7%		2	56.7%	30.3%		2	66.6%	31.0%		2	
VT	Vermont					3	0			3	0			3	0
WA-01	Suzan DelBene	(D)	59.1	38.2	20.9	1	54.1	37.8	16.3	1	54.1	43.3	10.8	1	
WA-02	Rick Larsen	(D)	62.1	35.1	27.0	1	56.9	34.8	22.1	1	59.2	38.0	21.2	1	
WA-03	Jaime Herrera Beutler	(R)	46.9	50.6	-3.7	1	42.5	49.9	-7.4	1	47.9	49.6	-1.7	1	
WA-04	Dan Newhouse	(R)	39.6	57.8	-18.2	1	35.1	57.9	-22.8	1	37.9	59.7	-21.8	1	
WA-05	Cathy McMorris Rodg	(R)	44.0	53.0	-9.0	1	39.1	52.2	-13.1	1	43.7	53.5	-9.8	1	
WA-06	Derek Kilmer	(D)	57.4	39.6	17.8	1	51.8	39.5	12.3	1	56.1	41.2	14.9	1	
WA-07	Pramila Jayapal	(D)	85.7	12.3	73.4	1	82.1	12.2	69.9	1	79.2	18.1	61.1	1	
WA-08	Kim Schrier	(D)	52.0	45.5	6.5	1	47.7	44.7	3.0	1	49.7	48.1	1.6	1	
WA-09	Adam Smith	(D)	73.3	24.6	48.7	1	70.5	23.3	47.2	1	68.3	29.6	38.7	1	
WA-10	Marilyn Strickland	(D)	56.2	40.7	15.5	1	51.3	39.9	11.4	1	56.3	41.1	15.2	1	
WA	Washington		58.0%	38.8%		2	52.5%	36.8%		2	56.2%	41.3%		2	
WA	Washington					9	3			9	3			9	3
WI-01	Bryan Steil	(R)	44.7	53.9	-9.2	1	42.3	52.6	-10.3	1	47.4	51.6	-4.2	1	
WI-02	Mark Pocan	(D)	69.4	29.2	40.2	1	65.8	29.0	36.8	1	68.3	30.5	37.8	1	
WI-03	Ron Kind	(D)	46.8	51.5	-4.7	1	44.8	49.3	-4.5	1	54.8	43.8	11.0	1	
WI-04	Gwen Moore	(D)	76.2	22.6	53.6	1	74.0	21.8	52.2	1	75.3	23.8	51.5	1	
WI-05	Scott Fitzgerald	(R)	41.7	56.8	-15.1	1	37.3	57.4	-20.1	1	37.7	61.3	-23.6	1	
WI-06	Glenn Grothman	(R)	41.6	56.8	-15.2	1	38.8	55.7	-16.9	1	45.8	53.1	-7.3	1	
WI-07	Tom Tiffany	(R)	39.3	59.2	-19.9	1	37.3	57.7	-20.4	1	47.8	50.9	-3.1	1	
WI-08	Mike Gallagher	(R)	41.3	57.2	-15.9	1	38.6	56.2	-17.6	1	47.6	51.3	-3.7	1	
WI	Wisconsin		49.4%	48.8%		2	46.5%	47.2%		2	52.8%	45.9%		2	
WI	Wisconsin					4	6			2	8			5	5
WV-01	David McKinley	(R)	30.3	68.0	-37.7	1	26.4	68.0	-41.6	1	35.5	62.2	-26.7	1	
WV-02	Alex Mooney	(R)	32.8	65.4	-32.6	1	29.4	65.8	-36.4	1	38.0	60.0	-22.0	1	
WV-03	Carol Miller	(R)	25.5	73.1	-47.6	1	23.3	72.5	-49.2	1	32.8	65.0	-32.2	1	
WV	West Virginia		29.7%	68.6%		2	26.4%	68.5%		2	35.5%	62.3%		2	
WV	West Virginia					0	5			0	5			0	5
WY-AL	Liz Cheney	(R)	26.7	70.4	-43.7	1	22.5	70.1	-47.6	1	28.0	69.2	-41.2	1	
WY	Wyoming		26.6%	69.9%		2	21.9%	68.2%		2	47.1%	51.0%		2	
WY	Wyoming					0	3			0	3			0	3

出典：Daily Kos

<https://www.dailykos.com/stories/2020/11/19/1163009/-Daily-Kos-Elections-presidential-results-by-congressional-district-for-2020-2016-and-2012>